明代白話小説ノート

――短編小説・「三言」（一）――

尾上兼英

一　まえおき
二　女の運命
　1　婦人之義、從一而終
　2　女子生而願爲之有家
　3　婦人水性無常
　4　夫妻是一世之事
　5　有智（志）婦人、勝如男子
三　むすび

一　まえおき

「書會」で作られ「老郎」が傳誦した「話本」は、元末から明代中葉にかけて書物として定着する。(1) ややおくれて、

その體裁にならつた「擬話本」の創作が始まり、清代にかけて白話小說の隆盛期を迎えることになる。「語り物から讀本へ」の屈折點としての位置を、短編小說においては「三言」がしめることになる。(2)

茂苑野史氏の藏書には、古今の通俗小說がはなはだ豐富であつた。そこで出版者の懇請により、そのなかから民衆の耳目を益するものを選びだし、四十種をかぎつて一刻とした。(『古今小說』綠天館主人序)

龍子猶氏の編集した喩世などの書物は、なかなか品もよく、當時の良規を明らかにし、今日の陋習を打破するものである。しかも宋元時代の作品はほとんど網羅されている。(『拍案驚奇』卽空觀主人序)

茂苑とは長洲の古名であり、茂苑野史氏が馮夢龍をさすことはいうまでもない。龍子猶は馮夢龍の號であり、「喩世など」というのは『古今小說』(『喩世明言』)『警世通言』『醒世恒言』のいわゆる「三言」をさす。

馮夢龍は單行された家藏の「話本」を四十篇一組として編集し、三集まで出版した。凌蒙初が「ほとんど網羅」といつたのは、『醉翁談錄』『寶文堂書目』『也是園書目』などに見える「話本」の題目に相當するものが多いということで、馮氏自身の創作を含むとはいえ、傳來の作品を整理し編集したものと見なしてさしつかえないことを示すものである。ただし前記の書目の題目から察すると、散佚した作品はすくなくないのであるが、「民衆の耳目を益するもの」といい、また「明言・通言・恒言をもつて六經國史の補助と考えてもよいのではなかろうか」(『醒世恒言』可一居士序)という立場からすれば、採錄し難いものが多かつたのであろう。

「三言」の流行、ついで「三言」「二拍」からの選抄本である『今古奇觀』の流行によつて、從前の單行の話本を淘汰し、嘉靖年間に編集、刊行された「六十家小說」をも稀覯本としてしまつた。そのことの意味は別に考えなければならないのであるが、とにかく殘存する話本は「三言」の立場から認められる枠の中におさまるものに限定されて

しまつた。しかし、なお宋元以來の民衆の生活感情をさぐる寶庫としての價値は失わない。

「三言」のあとをうける「二拍」については、孫楷第のいう「自作總集」としての別の要素を考慮にいれる必要があるので別稿とし、とりあえず「三言」のテーマを大まかにわけ、何に強い關心を示したかを探つていきたい。

二　女の運命

中國の家族、とくに家父長權と婦人の地位については、つとに仁井田博士の指摘されるところであるが、[3] そしてその論文には、戲曲小說類にいたるまで博搜されているのであるが、小說史の側から、いま一度檢討を加えてみたい。以下はそのための資料の一應の整理である。

婦人には三從の義があり、專用の道はない。すなわち嫁入り前は父に從い、嫁入り後は夫に從い、夫の死後は子に從う。そこで父は子の天であり、夫は妻の天である。（『儀禮』喪服傳）

これが「三從」とよばれる婦德であつて、儒家の「理念」の中におかれた婦人の地位である。ここでは一點の疑念もなく、父――子、夫――妻は自然の秩序と同一の關係におかれる。婦人には「專用の道」、端的にいえば家がなく、被支配の關係しかないと規定されているのである。

飲食男女（食欲・性欲）は人の大欲の存するところであり、死亡貧苦は人の大惡の存するところである。（『禮記』禮運）

右の一文は、自然存在としての人間の欲望、嫌惡の感情を、儒家も「事實」として認めていたことを物語る。しか

し、婦人に固有の人權は、秩序の許すかぎりにおいて認められるので、この事實も男の側にむかつてのみ有效な倫理として承認されたにすぎないことに留意する必要がある。

これら古代の儒家の原理は、變質を經ながらも儒教的理念の支配する時代には一貫しているが、明代の民衆はどのようにうけとめていたであろうか。「三言」中の物語りを大まかな類型にわけ、考察を進めることにする。

〈1〉　婦人之義、從一而終

「三從」のうちの第一、「在家從父」（『古今小說』第二卷、以下古2と略稱）は、その限りではあまり問題を生じないが、緣談がもちあがると紛糾の端緒となる。ここで女の運命が第一の「從」から第二の「從」へと移されるのであるが、婚姻の決定權が父にあり、本人の意志は確認されないためである。

結婚を自明のことと前提するのは、男の側からいえば「不孝有三、無後爲大」（『孟子』離婁上、恒2ほか小說中にしばしば見られる）という孝のモラルの上に立つており、受身の立場の女の側から見れば、自立できる經濟力をもちえぬ狀況におかれている以上、第二の「從」に安定をもとめる以外に生存の道がないからである。從つて「婦道家嫁人不着、一世之苦」（通22、これについては〈2〉でのべる）ということになり、一生の苦しみをまぬかれるためには、相手の如何ではなく、結婚自體を目的に生きなければならなくなる。當事者の愛情は問うところではない。

男・女の側にこうした條件があるので、緣談を推進する親の立場からは、「男大須婚、女大須嫁、不婚不嫁、弄出醜吒」（古4）とくに女性に關しては「女大不中留、留在家中、却如私鹽包兒、脫手方可」（通38）という諺の示すように、スキャンダルの起きる前に、まるで闇物資の鹽をもつているため生ずるトラブルを避けるため、それを放棄するように、娘を片づけたいと考える。婚約はそのように親の打算で決定され、この瞬間に娘にとつては「婦人之義、

從一而終」（古2・古4・古10・古27・通2・恒17）の運命が定まる。

典型的な例として「陳多壽生死夫妻」（恒9）についてみよう。

碁敵の陳青と朱世遠は、九歳の息子と娘の婚約をする。男の陳多壽は學問にはげんで將來を囑望されていたが、十五歳になつて癲にかかり前途の望みを失う。それを見て朱夫人は、夫のはやまつたことを責める。夫婦げんかの絶えぬ朱家の樣子に、陳家から婚約の解消を申し出、庚帖を返す。渡りに舟と朱家では、娘のためによかれと願つて破談をうけいれるのだと說得するが、娘の多福は「好人家女子、吃兩家茶」ということは聞いたことがないとつつぱね、「貧富苦樂、都是命中注定。生爲陳家婦、死爲陳家鬼」と決意を表明する。そこで朱夫人が折れ、破談の取消しを求める。

一方陳家では多壽に解消の決意が强く、再三媒人を通じ、また直接、娘の父親に休書（離緣狀）に代えて詩一首を渡す。それが評判となつて、朱家には媒婆が候補者をもつて集り、朱夫人は婿選びに熱中するが、それを見た多福はこれまでと考えて首をつる。父親の發見が早くて蘇生し、兩親も折れて、また媒人を通じて陳家との婚儀を急がせ、嫁いらせる。

新婦となつた多福は、帶もとかずに看病につとめ、夫の精氣の消耗を恐れて夫婦の交わりを求めない。多壽の方も添いとげられぬ病狀を思い、妻を淸淨のままでおきたいと考える。陳夫人は氣をもんで策を弄するが二人の決意は固い。二十一歳で結婚し三年たつたある日、多壽は算命先生に運勢を占つてもらい、二十四歳から三十三歳まで、運勢はいつそう惡くなるという見立てで決心し、砒礪を買つて酒にまぜ、妻にそれとなく別離のことばを殘してそれを飲む。妻もそれを見て「同生同死」の誓い通り、殘りの酒を飲んで自殺をはかる。

陳夫人がそれを察して驅けつけ、羊の生血をかけると蘇生するという民間療法を思い出し、やつと二人は命をとりとめる。服毒の結果、多壽は病體であつたので皮膚が裂けて出血し、そのため惡血が體外に出て癩瘡が癒え、もとの體にもどる。三十三歳で登科、翌年任官して長壽を保ち、子孫も繁昌する。かくて多福は「三冬不改孤松操、萬苦難移烈女心」の賞贊をえる。

ハッピーエンドはこの時代の小說の常であるが、これは餘りにもみごとに繪に書いたような烈女の物語であり、多壽・多福の名からしても、作爲は見えすいている。この物語は別表のごとく、諸家は一致して明代の作品とする。また孫楷第・趙景深の兩氏が馮夢龍の擬作と推定するのは、さきに引いた序文の趣旨からしても當然その可能性が考えられる。構成が型にはまつていて、できのよい作品とはいえず、士人の庶民に對する敎化意識の濃厚な點から、庶民の感情を忠實に反映したものと見なすことはできないが、親權を從におくことをいとわず、親のきめた婚約に固執する熱意の形をとつて「婦人之義、從一而終」の倫理を貫徹させていることは、「孝」（つまり第一の「從」）を第一とする士人の規範よりも、「貞」（つまり第二の「從」）に重心を移してぎりぎりの生存の保證を得ようとする女と、それを支持する小說作者の存在に注目しなければなるまい。これは男に對する「孝」と同次元の女に對する「貞」を盾とする抵抗であるが、親權に制約を加え、人情に加擔する點で庶民のモラルに近いと見てさしつかえあるまい。

この型の物語の特徵は、親のきめた婚約が支障のために、再び親の手で破談になる。

娘は「孝」と「貞」の矛盾になやむが、「貞」を固執して抵抗する。

娘の兩親のいずれかが（多くは母親）娘の肩をもち、娘の意志が通る。

この場合相手の男も、娘の烈女ぶりにふさわしくなければならぬ（「男才女貌正相和」（通23）「聰明女得聰明婿」

(恒11)。ということは科擧の試驗に合格するか、金持となつて、破談の原因を消滅させたことを讀者、もしくは聽衆に納得させなければならぬのである。

かくて夫婦は團圓し、子孫は繁昌するという結末になる。

こうした「升官發財、子孫富貴」(古17)の素朴な、しかし熱烈な願望が、女の貞節と結合して作られた理想的なパターンは、「忠臣不事二君、烈女不更二夫」(通2・通12)が示すように、君臣關係に比定され、社會秩序を維持する重要な德目ということになり、「貞」を「孝」より優位におくことは、民衆の自然の感情に近いと考えられると同時に、體制側にも有利に働くものであつたであろうことを看過してはなるまい。それ故に「從一而終」は通俗小說の好個のテーマとなり、さまざまなバリエーションを生み出す。

「孝」と「貞」の相剋という場に女性がおかれるとすれば、この型の小說の展開は、どういう狀況を設定して讀者の關心をひきつけ興味をもりあげるかに、作者の目はむけられる。幾つかの例をあげて追求してみよう。

「范鰍兒雙鏡重圓」(通12)は、結婚の場を建州の范汝爲の指導する農民暴動の混亂の中に設定する。

赴任する父親に伴なわれて建州を通過した娘は、さらわれて汝爲の一族の范希周の目にとまり、結婚の申し入れを受ける。やがて希周らは鎭壓の官軍に包圍されるが、娘の父親の從軍を知つて逃亡させ、自分も姿をくらます。娘をとりもどした父親は、再婚をすすめるが、娘はききいれず、こう申し立てる。

范家郎君、本是讀書君子、爲族人所逼、實非得已。他雖在賊中、每行方便、不做傷天理的事。倘若天公有眼、此人必脫虎口。大海浮萍、或有相逢之日。

孩兒如今情願奉道在家、侍養二親、便終身守寡、死而不怨。若必欲孩兒改嫁、不如容孩兒自盡、不失爲完節之婦。

結果は、姓を變え他縣で役人となつていた希周が、娘の家に使者に來て再會し團圓するのであるが、「或有相逢之日」という僥倖を期待し、「終身守寡」になろうとも「不失爲完節之婦」と主張する娘の立場は、多壽の快癒が絶望的であろうと婚約を通そうとする多福の場合と變らない。そして兩者に共通するのは、相手が「讀書君子」であり、通12は「不做傷天理的事」であることが、この女の「貞」の主張を正當とする心理的根據となつている。

父親がどの點を認めたか明言はしていないが、「他（娘）說出一班道理、也不去逼他了」ということなり、「孝」の强要（親權）が「貞」に一歩ゆずる。

この物語は宋の「撫青雜說」（『說郛』卷37）によつているので、すでに「話本」の作者と聽衆の間に承認されたモラルであつたことがわかる。

「宋小官團圓破氈笠」（通22）は明代の作品であるが、恒9と通12を複合し、それに因果應報をからませた物語である。盜賊の陰匿物を手に入れて――そこに因果應報の理が働いていて、それを着服したことは問われない――金持となつて現われた夫との團圓というストーリーは、通12と揆を一にするのであるが、通12では父親の手による婚約ではなく、捕われの身となつた娘を希周が良家の娘と知つて求婚し、娘の方は「本不願相從、落在其中、出於無奈、只得許允」といういきさつで結婚するので、再婚のすすめは、父親が前言をひるがえして强要したのではない點が異る。しかし、いずれの場合も、當事者の愛情に發した結婚ではなく、外からの强制による點では同じと理解してよい。

通22の別離の契機は、子供の死によるショックから夫が「癆瘵」にかかり、「三分人、七分鬼」という狀態になつたことに求められる。不治の病となつた婿に娘の父（船頭）が見切りをつけて、岸に上つて柴刈りを命じ置きざりにする。出帆後、厄介拂いをしてやつたのだといつて、娘に再婚するように說得するのであるが、娘は次のよう

なたんかをきつて反抗する。

爹做的是什麽事。都是不仁不義、傷天理的勾當。宋郎（夫）這頭親事、原是二親主張。既做了夫妻、同生同死、豈可翻悔。就是他病勢必死、亦當待其善終、何忍棄之於無人之地。宋郎今日爲奴而死、奴決不獨生。爹若可憐見孩兒、快轉船上水、尋取宋郎回來、免被傍人譏謗。

爹媽養得奴的身、養不得奴的心。孩兒左右是要死的、不如放奴早死、以見宋郎之面。

これは船頭の娘なので、通12のように士人の倫理をふりかざしての反抗ではなく、「可憐見孩兒」と人情に、また「傷天理的勾當」によつて「被傍人譏謗」になると面子に訴えての反對である。そして、結婚は兩親の決定に從つたのであるから、「既做了夫妻」という事實を認めよと迫るのである。この場合は、夫に對する愛情を明示はしていないが、「還我宋郎來」と泣きわめき、兩親が折れて各地に尋ね人の貼紙を出すことで妥協を求めると「丈夫是終身之孝」――『孟子』の「大孝終身慕夫母」（萬章上）と對應しており、親權だけでは片づかない――といつて喪服をぬがず、さらに再婚をすすめられると「寧可帶孝而死」といつて脅迫するという背後に、夫婦愛を認めることができるかもしれぬ。通12の「不如容孩兒自盡」にも見られるように、士庶を問わず娘の抵抗の最後通告は自殺である。これは「養兒待老、積穀防饑」（通22）という諺の示す、子供を養老保險と考えている親の立場への決定的な打擊であり、「儞（娘）若死時、我兩口兒性命也都難保」（通22）という親を、屈服に追いこむことができるのである。

ところで「養不得心」というのは、子は親の所有物という考えに對する眞向からの挑戰であり、新しい親子關係が「貞」をめぐつて生れつつあると理解してよいであろう。

「金玉奴棒打薄情郎」（古27）は、離別の動機が男のエゴイズムにある。

ある貧乏な男が學資を「乞丐」の「團頭」から得、その娘と結婚するが、科擧に合格して任官すると妻の出身を忌んで赴任の途中で湖中につきおとす。偶然通りかかつた夫の上官に助けられた妻は、その養女として結婚させられる。それを拒むせりふは、

奴家雖出寒門、頗知禮敎。旣與莫郎（夫）結髮、從一而終。雖然莫郎嫌貧棄賤、忍心害理、奴家各盡其道、豈肯改嫁、以傷婦節。

であつて、自分を殺そうとした夫に對しても「從一而終」を通し、「傷婦節」に反對するのである。

「禮敎」が愛情のない結婚の繼續を主張し、それに殉ずることによつてしか女の生きる道がないことを示している。この物語は、再婚の相手が夫であることを知つた妻が、上役の娘と結婚するつもりで意氣揚々と來た男を、腹いせに女中を指揮してなぐらせる、そこで當然決裂となるべきところ、雨降つて地固る式に「夫婦和好、比前加倍」と團圓するというでたらめさであるが、「姻緣前定枉勞爭」が作者の解釋であり、當時の女の位置をよく物語つている。

「杜十娘怒沈百寶箱」（通32）の別離の原因は、父親の怒りを恐れる男の臆病さと欲のためである。

夫人は妓女である。父親と妻を天秤にかけ、父を選んで妻を轉賣（この場合は再婚ではない）した男に愛想づかしをし「誰知郎君相信不深、惑於浮議、中道見棄、負妾一片眞心。……妾不負郎君、郎君自負妾耳」のことばを殘して投身自殺をし、結果として「從一而終」を實現する。

「閒雲菴阮三償寃債」（古4）はやや變つた型の物語で、離別の原因が死別であり、結婚の原因は私通である。

發端は司馬相如・卓文君の故事に似て、簫の音に聞きほれた大家の娘が、男を呼んで會うが父親の歸宅にはばまれ、ことばもかわさないで別れる。男は戀患いで消衰するが、尼の手引きで一度の密會の機を得、その場で死ぬ。娘

は、

婦人從一而終、雖是一時苟合、亦是一日夫妻、我斷然再不嫁人。若天可憐見、生得一個男子、守他長大、送還阮（夫）家、完了夫妻之情。那時尋個自盡、以贖玷辱父母之罪。

と辯解する。すでに妊娠しており、相手が死んでいるため、娘の兩親は止むをえず承認する。生れた子供は科擧に合格し、吏部尚書留守官となり、十九歳から後家を通した母の苦節を上奏し、賢節牌坊の建設が許される。

作者は、この兩人を揚州の名妓と金陵の男の再生であり、前世の因緣に結着をつけるための私通であつたと、合理化する常套手法をとつているが、「世情以成敗論人、大率如此」とちよつぴり皮肉をもらし、「貧家百事百難做、富家差得鬼推磨」と、貧しく力ないもののために不滿をのべている。

これは私通が「從一而終」で相殺される型に屬し、これを男の側から描いた古23では、私通が科擧合格で帳消しになるというパターンになる。いずれもストーリーは『鶯々傳』型に屬するが、強いて團圓を求めるところが庶民の感情にうけるのであろう。

以上にあげた作品中の娘の出身は、官吏が通12・古4、地主は恒9、船頭が通22、乞丐が古27、妓女が通32であり、製作年代は官吏の二例が宋傳來とされるほかは明代と見てよい。そこで氣がつくことは、官吏の二例がむしろ人情として自然に近いのに反して、出身階層を越えて高望みをする恒9と古27は、異常な夫婦關係を現出する。前者は倫理の權化で人情に遠く、後者は殺人者を再び夫と迎えて圓滿に推移するという、人情として解し難い不自然さがある。通22は船頭の娘として働く者の强みがあり、通32は妓女の心意氣を示すものであると同時に、賤業とはいえ經濟的自立の能力をもつことから得られる自由を、自已の責任において發揮するところに、作中人物の階層による指向をうか

がうことができる。(4)

最後に、これらの婚姻において、娘の意見を求められることがないということを指摘しておこう。そして決定に參與しないことに對する怒りが――娘の側からも、第三者としての作者（說話人）からも――ないことが作品の時代性を有辯に物語つている。娘が自分の選擇に從うことは私通による以外になく、それは「做出天大事來」（古4）をあえてすることであり、秩序の外にはじき出されることになるのである。

〈2〉　女子生而願爲之有家

「從一而終」は外からの强制であるが、同時にそれを受けいれる條件が、女の側にもある。恒9・古27の不自然さは、實は「三從」の中に女自身の家がないことに淵源するのである。通12・古4は官吏の娘であつたので、また通22の船頭の娘は船という働く場をもつていたので、「終身守寡」が可能であり、惠まれた場合であつたといえる。

家をもたぬことで代表的な女は妓女である。いつたん妓籍にはいると、一生浮草稼業で終らねばならぬ場合が多い。そこで「婦道家嫁人不着、一世之苦」（通22）ということになり、必死の願いを良民の妻になることにかける。

これは男の側からいえば、身價の問題さえかたずけば、選擇の自由があり好都合であるが、浮氣心を許さぬ執念につけ廻わされているという危險を犯していることでもある。「做買賣不着、只一時。討老婆不着、是一世」（古1）の諺が示すように「六十年の不作」をかこつだけですむならばまだしも、まかりまちがえば寢首をかかれかねない關係におかれることになる。（『金瓶梅』の潘金蓮と武大の例をあげるまでもなく、話本には離婚の不自由が夫殺しに發展する例が多い。(5)）

しかし、女の側から見ても、選擇に失敗すれば、たとえ「枳棘豈堪鳳凰所棲」（古17）という玉の興を悔やむ場合であ

ろうと、自由に變更を求めることはできず、まして多くは「嫁犬逐犬、嫁鷄逐鷄」（古27）の泣き寢入りに終るのである。ここから生ずる葛藤は變化に富み、說話人にとつて恰好のテーマであるばかりか、材料も豐富なので作品が多い。

妓女の場合の團圓から見よう。

「單符郎全州佳偶」（古17）は、親のきめた婚約と離別・再會という型に屬し、〈1〉にあげた物語のバリエーションと見なしてよいが、女が妓女である點が異る。

單家に符郎（符郎は幼名、名は飛英）邢家に春娘という同年生れの息子と娘の親が婚約し、やがて相方の親は任地へわかれていく。任期滿了後に都で擧式の約束であつたが、金軍の侵略に遭遇し、邢家は全滅、一人助かつた春娘は亂兵にかどわかされ、全州の樂戶、楊家の妓女に賣られる。

一方、成人した符郎は全州司戶となり、そこで見染めた楊玉（春娘の妓名）との二年越しの戀がみのり、固物の太守の任期ぎれを待つて手に入れる。楊玉の物腰から官吏の娘と察して事情を聞くうちに、婚約者の春娘と判明し、彼女の叔父の邢祥に知らせ、太守に願い出て妓籍からぬいてもらい、正式に結婚する。

單符郎は離任の際、春娘の願いをいれて楊家の妓女たちと別離の宴をはる。その時、春娘の妹分であつた李英が「汙泥・糞土」の地から救い出してくれと賴みこむ。春娘は李英のたつての願いに條件をつける。

春娘　我司戶正少一針綫人、吾妹肯來與我作伴否。

李英　若得阿姊爲我方便、得脫此門路、是一段大陰德事。若司戶左右要覓針綫人、得我爲之、素知阿姊心性、强似尋生分人也。

春娘　雖然如此、但吾妹平日與我同行同輩、今日豈能居我之下乎。

李英　我在風塵中每自退姉一歩、況今日雲泥迥隔、又有嫡庶之異、卽使朝夕奉侍阿姉、比于侍婢、亦所甘心、況敢與阿姉比肩耶。

春娘　妹既有心、奴當與司戸商之。

李英のせりふにある「大陰德事」、あるいは「嫡庶之異」にも「比于侍婢、亦所甘心」にも「風塵」からはいだしたい必死の心情が見られるのではなかろうか。かくて、

春娘は李英のために單符郎を口説くが、符郎が相手にならないので、春娘は奥の手を使う。

「官人能終身不納姬侍則已。若納他人、不如納李家妹、與我少小相處、兩不見笑」

そこで符郎は太守に頼んで李英の妓籍もぬいてもらい、同伴して都へ歸る。符郎の父は妾を見て激昂するが、母が李英の人柄を見込んでとりなし、圓くおさまる。

この物語を符郎の側から見ると、婚約者が戰亂のため行方不明となり、偶然見染めた妓女がかつての婚約者であつたということで、父親の勘氣をまぬかれ、また「甘娶風塵之女、不以存亡易心、雖古人高義、不是過也」という過褒の辭を得、さらに一妾をも手に入れた果報者ということに過ぎない。

しかし、春娘の側から見ると、少々趣きが違う。彼女には、かつての婚約者に對する「貞」の意識――〈1〉で見たあのグロテスクなまでの――はまつたくない。もちろん「雖不幸風塵、實出無奈。夫家宦族、卽使無恙、妾亦不作團圓之望」と、花柳の巷におちたのを止むを得ぬとする辯解と、それ故に團圓の望みを捨てたという、二重の辯解をさせる配慮を作者は忘れていないが、それよりもむしろ、「若得嫁一小民、荆釵布裙、啜菽飲水、亦是良人家媳婦。比在此中迎新送舊、勝却千萬倍矣」ということばの方に、「從良」に對する切なる願いが汲みとれる。單符郎の求婚に

對しても――もちろん正室として迎えられるとは春娘は考えていないので――泥水稼業から足を洗うことができ、「送往迎來」という娼女の暮しからのがれられれば心願はかなえられ、もし正夫人とあわぬ時は、身をひいて「持齋佞佛、終身獨宿」という將來の展望さえもつて承諾するのである。かつての婚約が貫徹されたというのは、民衆のハッピー・エンド好きに迎合した作者の末技であつて、「女子生而願爲之有家」（古17）という女の念願をこそ汲みとるべきであろう。

ところで、李英の立場も興味深い。正妻と妾の關係は、仁井田博士の指摘のごとく、鍵の保管をめぐつて地位に格段の相違があるのだが、[6]――事實、正妻が夫にことわりなく妾を賣りとばす例が小説にはしばしば見られるが（恒36）――妾は第二、第三夫人の地位であり、この物語中では正妻と擬制された姉妹となり（通24も姉妹と稱している）日陰者的陰鬱さはまつたくない。從つて「從良」の成功者は、實は李英であつて、物語の進行とは別に、念願を達成した幸福な女と讀者の目にはうつつたであろう。春娘にめぐまれなかつた息子を李英に生ませたのは、父親の怒りにふれて「改嫁」を迫られたが――妾の場合は「從一而終」は抵抗の根據とならぬ（古6）――徹底して拒否した「貞」に對する作者の配慮からであり、幸福の仕上げである。

戰亂がいかに民衆に恐れられたかは、「寧爲太平犬、莫作亂離人」（古18・恒3・恒19）の諺が示す通りである。平和な時代の犬にも劣る人間の運命のなかで、肉親との再會は何ものにも勝る喜びであつたろう。まして妓籍におちた女の場合は、二重の好運であり、これが事實談として「至今青樓傳爲佳話」と語られた時、聽衆に期待のみたされた滿足感を與えたであろうことは容易に想像される。

ここで「從良」についてみよう。妓女にとつて、どれだけ魅力のあることばであつたかは、楊玉のことばでも明らかであるが、「倘得姨娘主張從良、勝造九級浮圖。若要我倚門獻笑、送舊迎新、寧甘一死、決不情願」（恒3）に見える「勝造九級浮圖」を額面通り受けとるならば、「救人一命、勝造七級浮屠」（古29・古30・恒10・恒22）と比較して、生命の恩人以上の感謝をささげることになる。「從良」が妓女にとつて必死の願いであつたことがわかろう。しかし、「從良」といつても様々なケースがあり、それを分類している例がある。

1　眞從良

大凡才子必須佳人、佳人必須才子、方成佳配。……一個願討、一個願嫁。好像捉對的蠶蛾、死也不放。

これは才子と佳人が「好事多磨、往往求之不得」を經て最後は「幸然兩下相逢、倆貪我愛、割舍不下」で終る最もありふれた通俗小説の型であり、説話人の腕の見せ場は、「磨」にどれだけの工夫を加えて聽衆の氣をもませるかにある。古17は、この一例である。

2　假從良

有等子弟愛着小娘、小娘却不愛那子弟。本心不願嫁他、只把個嫁字兒哄他熱心、撒漫銀錢。比及成交、却又推故不就。

有一等痴心的子弟、曉得小娘心腸不對他、偏要娶他回去。拼着一主大錢、動了媽兒的火、不怕小娘不肯。勉强進門、心中不順、故意不守家規。小則撒潑放肆、大則公然偷漢。人家容留不得、多則一年、少則半載、依舊放他出來、爲娼接客。

これは妓樓に足を運ぶ坊ちやん連を相手に「從良」を「只當個撰錢的題目」としてちらつかせて氣をもたせ、萬一、

錢を積んで落籍されても、氣に入られぬようふるまつて元の巣に歸つて來る妓女一般の生態をいう――妓女と鴇兒の生態については「小娘愛俏、鴇兒愛鈔」（古12）という諺がある。2の場合はこの諺の後半に重點があり、前半部分は後述の8に該當する――「從良」である。2の場合は6とともに例外的に妓女の側の期待をふくまない。

3　苦從良

一般樣子弟愛小娘、小娘子不愛那子弟、却被他以勢凌之。嫣惧禍、已自許了。做小娘的、身不繇主、含淚而行。一入侯門、如海之深、家法又嚴、擡頭不得。半妾半婢、忍死度日。

これは、男の側の片思いは2と同樣であり、2は錢ずくであつたが、これは權柄ずくで、鴇婆の手にさえ餘り、むりやり落籍されて泣きの涙で暮す場合である。

4　樂從良

做小娘的、正當撰人之際、偶然相交個子弟。見他情性溫和、家道富足、又且大娘子樂善、無男無女、指望他日過門、與他生育、就有主母之分。以此嫁他、圖個日前安逸、日後出身。

これは人柄のよい金持のなじみになり、正妻も人が好く子供のない家の妾となり、子供を生んで事實上の主婦の座に納まるケースで、妓女にとつては最も實現の可能性のある望ましい「從良」である。古17の李英はこれに當る。

5　趁好的從良

做小娘的、風花雪月、受用已勾、趁這盛名之下、求之者衆、任我揀撰個十分滿意的嫁他、急流勇退、及早回頭、不致受人怠慢。

これは花の盛りに浮いた生活に見きりをつけ、さつさと氣に入つた相手を撰んで足を洗う「從良」で、老醜をさら

さずにすむ方法である。これこそ最も望ましいことであろうが、名妓とよばれる限られた女にしか通用しない。

6　沒奈何的從良

做小娘的、原無從良之意、或因官司逼迫、或因債太多、將來賠償不起、鷩口氣、不論好歹、得嫁便嫁、買靜求安。

これは權力者や債鬼に追われてどうにもならなくなり、その場逃れに相手かまわず結婚する「藏身之法」であつて、「從良」の一種には違いないが、それ自體が目的ではない

7　了從良

小娘半老之際、風波歷盡、剛好遇個老成的孤老、兩下志同道合、收繩捲索、白頭到老。

これは盛りもすぎてから、運よく似合いの客となじみになり、足を洗つて添いとげるケースをいう。

8　不了的從良

一般儞貪我愛、火熱的跟他、却是一時之興、沒有個長算。

或者大娘妒忌、鬧了幾場、發回媽家、追取原價。又有個家道凋零、養他不活、苦守不過、依舊出來趕趁。

これはのぼせあがつて男の後を追いかけたが、正妻の嫉妬にあつて追い返され、「身價」をとりもどされるか、あるいは男の家が零落して暮しが立たなくなるか、いずれにせよ先の見通しもつけずに結婚したため、結局再び左褄をとらねばならないはめに落ちるケースである。

これによつて見れば、「從良」に價するのは1・4・5・7で、一應望みを達しても結果のよくないのが3・8、問題にならないのが2・6ということになる。しかし「有家」という點から見れば、6はやけつぱちながらも目的を達し、8は戀の燃燒はあるが元の木阿彌ということで、失格は2・8ということになる。

この分類は、「從良」の願いを逆用し、「接客」をこばむ妓女の説得に使われたもので、恒3に見える。

「賣油郎獨占花魁」（恒3）は、古17同様、金軍侵略下の北宋末期に時代を設定し、汴京から臨安に逃れた莘瑤琴（妓名は王美娘）と油商人の秦重が結ばれる物語である。

汴京を逃れ、混亂の中で兩親を見失つた瑤琴は、臨安の妓樓に賣られるが「接客」を拒む。「接客」を拒む妓女は妾として賣られるので、相手を撰ぶことができないが、「接客」の間に「私房」をたくわえ相手を物色していれば、五年、十年の間には從良の願いはかなうという口車にのせられ、美娘は妓女としての名聲をはせるようになり、王孫公子にちやほやされて初心を失つていつたが、律氣な商人の秦重の誠意に目がさめ、「私房」で「身價」を拂つて夫婦となる。秦重の店に雇われていた番頭は瑤琴の兩親であり、秦重の父親も見つかつて骨肉團圓する。

美娘の秦重に對する態度の變化をたどつてみよう。

始めて秦重が登樓した時の瑤琴のせりふ。

臨安郡中、並不聞說起有什麼秦小官人。我不去接他。

泥醉した美娘は、翌朝になつて秦重が介抱してくれたことを知つて思うこと。

難得這好人、又忠厚、又老實、又且知情識趣、隱惡揚善、千百中難遇此一人。可惜是市井之輩。若是衣冠子弟、情願委身事之。

秦重の誠意を知つた時は、まだその身分に抱泥していたが、吳八公子の凌辱をうけ湖畔にほうり出された際、偶然通り合わせた秦重に家まで送られてのせりふ。

我一向有心於爾、恨不得爾見面。今日定然不放爾空去。

そして、その夜の對話。

美娘　我有句心腹之言與儞說、儞休得推托。

秦重　小娘子若用得着小可時、就赴湯踏火、亦所不辭、豈有推托之理。

美娘　我要嫁儞。

秦重　小娘子就嫁一萬個、也還數不到小可頭上、休得取笑、枉自折了小可的食料。

美娘　這話實是眞心、怎說取笑二字。我自十四歲被媽媽灌醉、梳弄過了。此時便要從良。只爲未曾相處得人、不辨好歹、恐誤了終身大事。以後相處的雖多、都是豪華之輩、酒色之徒、但知買笑追歡的樂意、那有憐香惜玉的眞心。看來看去、只有儞是個志誠君子。況聞儞尙未娶親、若不嫌我烟花賤質、情願擧案齊眉、白頭奉侍。儞若不允之時、我就將三尺白羅、死於君前、表白我一片誠心、也强如昨日死於村郎之手、沒名沒目、惹人笑話。

秦重にとつては高嶺の花の美娘から求婚されて、萬分の一にも該當しない身の程をよく承知しているので一笑に付すが、美娘は身の上を語つて誠意を披瀝し、王孫公子に見きりをつけ秦重に白羽の矢を立てた理由を說明し、自分を「烟花賤質」――「花魁娘子」の名聲を一皮むけば、これが眞實の姿であることの認識を得たことを示す――とへり下り、不承知なら死んで本心を見せようという。

美娘はもともと汴京の食料品店の娘である。妓女となつて鴇母や嫖客たちのお世辭にとりまかれて見失つていた自己を、秦重の生眞面目さのなかに發見し、本來の姿に歸つていく經過が、通俗小說としてはよく描かれている。この物語は女の側から夫を撰擇する機會にめぐまれる、すくない例のひとつで、「從良」の5に當る。

次に破局の例を見よう。

「杜十娘怒沈百寶箱」（通32）は、〈1〉で「結果として『從一而終』を實現」した例としてあげたが、「貞」に殉じたわけではなく、「久有從良之志」があえなく破れたための死である。

「院中若識杜老嫩、千家粉面都如鬼」とうたわれた名妓杜十娘は、受驗で上京した李公子を「忠厚志誠」と買いかぶり、持合わせが盡きて鴇兒から邪慳に扱われ始めると、「身價」の半分を「私房」で拂い、「從良」の願いをはたした、という前半と、折角の男が實は賴み甲斐のない男で、帶同して歸鄉する途中、父の怒りを恐れて轉賣したため、妓女の心意氣を示してあまたの財產もろとも長江に身を投じた、という後半からなる。

「身價」の半分を拂わせることによつて、男の誠意と信用度を確かめるという愼重さにもかかわらず、男を見る目の低さから失敗した點を、恒3と比較すれば、男の階級性――それは士人の倫理との距離によつてもはかれる――に對する庶民の目の確かさという見方ができる。

この物語の前半の構成は、唐の傳奇『李娃傳』をうけており、後半も自分の財力で男にしようとする心根は、傳來の妓女の物語と同樣であるが、李娃の望まなかつた「從良」への執着が杜十娘を盲目にし、同輩にうらやまれた落籍を悲劇に導いたのである。「從良」8の前半の變型である。

「趙春兒重旺曹家莊」（通31）は、破局には至らなかつたが、のぼせ上つて結婚した相手が放蕩者のために、杜十娘の二の舞となるところを、うまく切りぬけた物語である。通32の後半をハッピーエンドに仕立てた物語といえよう。

曹可成は春兒を落籍するため父親陰匿の銀をもち出すが、もともと浪費癖の强い男であるため、父の遺產は五十兩しか殘らなかつた。それを見て妻も「氣死」する。その後は春兒の「私房」をあてに浪費するが、春兒の戒めにより心を入れかえる。（この經過は〈5〉を參照）

妻に死なれた可成が、春兒を後妻に据えようとして考えを聞く際の會話を見よう。

春兒　此事（從良）我非不願、只怕儞還想娶大娘。

可成　我如今是什麽日子、還說這話。

春兒　儞目下雖如此說、怕日後掙得好時、又要尋良家正配、可不枉了我一片心機。

これを見ると、李娃のように積極的に良家から正妻を迎えることをすすめてはいないが、貧乏暮しの間だけの方便であろうという警戒を怠らず、杜十娘のように從良への執着をもたぬこと、また可成の人の好さが悲劇から救ったことがわかる。

友人が「儞當初費過幾千銀子在趙家、連這春兒的。身子都是儞贖的。儞今如此落莫、他却風花雪月受用、何不去告他一狀、追還些身價也好」とすすめたのに可成がのれば、典型的な「從良」8の後半に該當する物語となるが、可成が「當初之事、也是我自家情願、相好在前。今日重新番臉、却被子弟們笑話」と答えて結婚したので「從良」の4に當るという複合の物語である。

「玉堂春落難逢夫」（通24）は、「從良」の1に屬する物語であるが、作者の腕をふるつた「磨」によつて、「從良」の複雜な組み合わせの話となつている。

相思相愛の二人、王三官と玉堂春は誓いを立てる。

公子　我若南京再娶家小、五黃六月害病死了我。

玉姐　蘇三再若接別人、鐵鎖長枷永不出世。

しかし相愛の二人も、金の切れ目に鴇兒によつてひき割かれるが、王三官は科擧に及第する。（そのまま團圓す

れば、典型的な「從良」の1である）鴇兒はみすみす連れ去られるのを惜しみ、山西の商人に賣る。（ここに落着けば「從良」の3になる）そのため、わなにかけようとして鴇兒は「從良」を使う。

明日殺猪宰羊、買一桌紙錢、假說東獄廟看會、燒了紙、說了誓、合家從良、再不在烟花巷裏。小三（玉堂春）若聞知從良一節、必然也要往獄廟燒香。

この策略にひっかかって山西へ連れて行かれるが、商人の妻は情夫の入智慧で夫を毒殺し、罪を玉堂春になすりつける。王三官は玉堂春が行方不明になってから妻を迎えるが、獄中にある玉堂春の事件を知り、職權を利用して寃罪をはらし、改めて妾に迎える。妻妾は姉妹と稱して相和し、めでたくおさまる。（ここで「從良」の4となる）玉堂春は〈5〉で述べるように才智にたけた女であるが、やはり「從良」のことばのもつ魔力――この團圓は男から見ての好都合ばかりでなく、妓女が高官の子弟の正妻となることが難しい現實からしても（古17はもともと婚約という前提がある）玉堂春にとっての文字通り團圓である――には勝てなかったのである。

妓女と同樣な地位にあるのは、戰亂で捕虜となり奴婢となった女である。

「白玉孃忍苦成夫」（恒19）は、〈5〉に屬する女を、男から見て〈3〉と考えた食い違いから、「從良」の7に結果した物語である。

時は宋の滅亡期、元の侵略下の中國で程萬里は捕虜となり、兀良哈歹の部下の張萬戸から妻をあてがわれる。程は脫走の機を狙うが、妻の白玉孃もそれと察してすすめるので、張萬戸のわなと思って二度まで密告し、そのため白玉孃は轉賣される。やがて程は脫走して南宋に仕え、その後元に仕えたが玉孃を思って再婚せず、玉孃も「生來命薄、爲夫所棄、誓不再適。倘必欲見辱、有死而已」と決意して佛門にいたが、二十數年後に再會して團圓する。

この物語は、型としては〈1〉の「從一而終」であるが、奴婢の身分からようやく「有家」になつた時は、もはや「自己年長」であつたので、「從良」の7としてよいであろう。

妓女・奴婢と、身分の高下を問わなければ自由のない點で後宮の夫人も同樣である。後宮を皇帝專用の妓樓と見たてれば、彼女らに「從良」の願いをもつ者が現われても、ふしぎではない。

「勘皮靴單證二郎神」（恒13）は、皇帝の寵にもれた夫人が二郎神に願をかけ、それを聞いた廟主が妖術によつて誘惑することと、その犯人の追究をテーマとする物語である。しかし、夫人にだけ焦點をしぼれば、次のように解釋することができる。

一　夫人が春思病にかかり、宮廷内におけるよりは一般人の幸福を願つて「若是氏兒前程遠大、只願將來嫁得一個丈夫、恰似尊神（二郎神）模樣一般、也是稱生平之願」と祈願したことが事件の發端であるので、この願望は三千分の一ではない、專用もしくはそれに近い夫をもちたいという、愛に對する渴望を中心と考えることができる。愛の思いのつのる時に忽然と出現する理想の男性という非現實的設定に、女の「性」の哀れさが見られる。――女の人權の認められぬ封建時代の束縛から、超現實的世界を借りて表現されることが多い。（これは〈3〉で再びとりあげる）

二　皇帝から寵愛をうけるというのは、女の冥利という面があると思われるが、そのチャンスをふりすててまでも結婚したいというのは「有家」の熱望が底流としてあると考えてよかろう。事件解決後、後宮にもどることは許されないが、「改嫁良民爲婚」の聖旨が下り、地方から開封に店を出している商人の開封での妻という地位を得て「平生之願」が果たされたとする結びは、たとえ二分の一にせよ、妻の座を獲得したという點での喜びを見ることができる。

三　後宮の夫人が皇帝を諦めて他の男との結婚を願うということは、〈1〉にあげた「婦人之義、從一而終」＝貞に

反する行爲である。ということを逆にいえば、後宮に入るということは婚約を意味しないので、不貞の行爲とみなされぬということになる。それが常識として通用したのか、「人無千日紅、花有幾日紅」（通24）の諺が示す、娘盛りのうつろい易さに對する作者の同情に發するのか一考を要するところである。

恒13の場合は、幾通りかの解釋が可能であつたが、それは家がないための必死さがないところに、ある種の餘裕、遊戯の要素が作意にまじるためである。ところが寡婦の場合――それが一人娘である場合――は、とくに「有家」の願望を強くもつ。次の物語がそれである。

「楊八老越國奇逢」（古18）は、倭寇の捕虜となつて日本で教育され、「假倭寇」となつて侵入の先導をさせられるが、再び捕虜となり、身元を證明する、もとの使用人が現われて斬罪をまぬかれた男の運命がテーマである。

この男は西安と漳州を往來する商人で、西安に妻子がいるが、漳州のある寡婦が彼の人柄を見込み、同じく寡婦となつた娘の婿にしようと次のような論理で說得する。

儞千鄉萬里、出外爲客。若沒有切己的親戚、那個知疼着熱。如今我女兒年紀又小、正好相配官人、做個兩頭大、儞歸家去有娘子在家、在漳州來時、有我女兒、兩邊來往、都不寂寞、做生意也是方便順留的。老身又不費儞大錢大鈔。只是單生一女、要他嫁個好人、日後生男育女、連老身門戸都有依靠。就是儞家中娘子知道時、料也不嗔怪。多少做客的、娼樓妓館、使錢撒漫、這還是本分之事、官人須從長計較、休得推阻。

これで見ると、兩方に家をもつことで、遠隔の地で商賣する男の不便が解消し、女の側はよい婿ができ「生男育女、連老身門戸都有依靠」ともなれば、萬事めでたしであるとする合理性――もちろん一夫多妻が容認される社會であるから――は說得的であり、（恒13の解決も、この合理性の上にのつている）寡婦の「有家」の願望が、みごとに消化

されている。

この物語は、兩方の妻の息子が同じ土地で官吏となつており、そこへ歸國した父親を中心に一家團圓し、はじめて「有家」が有終の美を飾るのであるが、この歸國・再會がなければ――こういう偶然の設定は、「事有湊巧、物有偶然」というきまり文句で片づける通俗小說の定型である――養老保險としての子供に期待する、寡婦のエゴイズムだけに終るのである。（これも「三從」の三に對する期待である）

寡婦のありかたについては「呷得三斗醋、做得孤孀」（通35）の諺をひいて、說話人は「寡婦守節」の困難さに同情を示す。「孤孀不是好守的。瞽邵氏（女主人公）從長計較、到不如明明改個丈夫。雖做不得上等人、還不失爲中等人」（通35）というのは、士人あるいは大地主は別として、節婦の名をあえて欲しない女性の再婚を認めようとする民衆の良識を現わしているのであり、古18の寡婦の立場はこれに當る。

しかし、もう一方の潛在的寡婦である故鄉に殘された商人の妻も、考慮にいれねばならぬ。古18の男の自由の反面には、反比例して女の不自由がある。それに怒りを爆發させた例を「玉堂春落難逢夫」（通24）に見ることができる。

玉堂春を妾として連れ歸つた山西商人に對する妻のせりふ。

爲妻的整年月在家守活孤孀、倆都花柳快活、又帶這潑淫婦回來、全無夫妻之情。倆若要留這淫婦時、倆自在西廳一帶住下、不許來纏我。我也沒福受這淫婦的拜。不要他來。

この場合は、妻に姦通の事實があるので迫力に乏しいが、主張は正當であり、士人の妻はもらさぬ眞情が吐露されている。夫の留守を守る賢妻の場合は(5)に後述する「喬彥傑一妾破家」（通33）があり、いずれも男女の不平等に對する怒りがぶちまけられている。恒13の解決が合理的であると述べたのは、妾として割り込む女の立場からいつて、

「有家」の願望が達せられ、男の不自由を除くという一面においてのみ、の限定がつけられねばならない。

恒13は型としては「從良」の5と4に屬し、古18は4に屬するが、後宮の夫人や寡婦を妓女や奴婢と同列におくわけにいかないので、それぞれの例とすることは、ひかえておく。

これらは、いずれも女性の巣造り本能に根ざしており、その身分を問わず「女子生而願爲之有家」を共通要素としているが、始めから屬する家をもたぬ妓女・奴婢の場合は、「從良」の願いとして現われる。ここでは、とくに「從良」の型を手がかりに、「有家」の願望の强さを見てきたが、ここで殘した「從良」の2（假從良）、および6（沒奈何的從良）は、〈3〉においてとりあげる。

女の「有家」の願いの裏側に「無婦不成家」（恒10）があつて、補いあう關係になつている。「有家」が「三從」のどこかに自分の位置を得ようとする女の、必死の願望の現われということはすでにのべたが、女の側からする一方的なものでないことを、說話人は念頭において話柄としていることは注意しておく必要があろう。

〈3〉 婦人水性無常

前節の女性が「母性型」本能の現われと見ることのできる面があつたとすれば、他の極に「娼婦型」をおくことができる。それを稱して「婦人水性無常」（通32）というが、このことばは多く妓女にむかつて投げられる。たしかに妓女の生態をつくことばであろうが、通俗小說中では、そうした常識を破るものとして妓女が描かれ、それ故に話柄となる。杜十娘、王美娘、玉堂春、趙春兒らがそれである。最低の地位におかれた女性の人格の高潔さ故に、そして地位の向上と解放への志向の故に、現代の中國では高く評價される。(7)

それに反して、貞節であるべき人妻の私通に關する話題が、話本の好題材となる。それは商品の購入と販賣のため、

各地を旅行して不在勝ちの商人の妻に多い。商人の妻は、石母田教授の指摘の通り、[8] 主婦の座にあると同時に、一家の經濟權を握る確固とした地位にあり、男に伍してひけをとらぬ。

しかし、これを性の面から見ると、男の自由に對して、まつたく閉鎖されていることは(2)で述べた通りである。女の運命にとつて決定的であるのは、男のエゴイズムを支えている體制と表裏する、女性一般に對する不信があることだ。「不孝以無嗣爲大」(通29)をふりかざして男の浮氣を容認する思想はあるが、女の浮氣は認めない。「婦人水性」を、清代の『紅樓夢』では、水ゆえに清い(「女兒是水作的骨肉……我見了女兒、我便清爽」2回)と逆轉する立場をとるが、しかし、一般には女心の變りやすさとして男にとつての痛恨事とする。

昔年含淚別夫郎　今日悲啼送所歡
堪恨婦人多水性　招來野鳥勝文鸞(古1)

相愛の夫を旅に送り出して後、空閨に泣く「新娘」が、わなにかかつたとはいえ、私通した情夫が忘れられぬと嘆くさまを見て、男の立場からうたつたこの詩の「堪恨婦人多水性」に、それを見ることができよう。その悲喜劇を語るのが「蔣興哥重會珍珠衫」(古1)である。

襄陽の蔣興哥は王氏と結婚し、新婚の妻を殘して廣東へ商用で旅立つ。その留守に襄陽へ商賣に來た陳商が彼女を見染め、媒婆の手引きで密通に成功する。やがて陳商は新安へ歸るが、途中蘇州で蔣興哥と逢い、王氏から餞別にもらつた陳家の家寶の「珍珠衫」を見せ、そのため王氏の不貞が發覺する。

蔣興哥は歸鄉後、王氏を離緣し、王氏は役人の吳傑の妾となつて廣東への赴任に同行する。その際、蔣は王氏の再婚に手厚い賜物をする。一方陳商は再び襄陽に來て、王氏の「改嫁」を知つて失望し、それがもとで病死する。

その妻の平氏は、夫の遺體を引きとりに來たが、いい寄る男をはねつけたため、逆うらみしたその男の扇動にのつた番頭が、金目の品物一切を拐帶逃走する。平氏は夫の靈柩をかかえて困惑し「賣身葬夫」の決意を固める。再婚同士ということで決まつた相手が蔣興哥であつた。

蔣興哥はまた廣東へ商賣に行き、取引上のもつれから朱老人に傷を與え死亡させる。朱老人の遺族からの訴えをうけたのは、吳傑で、愛妾王氏の賴みを容れ、過失致死として結着をつける。王氏は蔣興哥を兄と稱して再會を許されるが、その場の樣子から事情を察した吳傑は、王氏が自分に嫁して「在此三年、不會生育」を理由に離緣し、王氏を蔣興哥に與える。かくて、蔣興哥は平氏を正妻に、王氏を側室としてめでたく團圓する。

この作品には、蔣興哥が王氏に與えた「休書」（離緣狀）の全文が載せられている。

立休書人蔣德、係襄陽府棗陽縣人。從初憑媒聘定王氏爲妻。豈期過門之後、本婦多有過失、正合七出之條。因念夫妻之情、不忍明言、情願退還本宗、聽憑改嫁、並無異言。休書是實。

成化二年　月　日　　手書爲記

王氏は、蔣興哥とは「七出」[9]の2により、吳傑とは1によつて離緣され、結局もとの鞘に納まるというのが、いかにも通俗小說にふさわしい庶民のモラルによつている。（不貞を離緣の理由とするが、再婚は意に介さぬ。むしろ團圓を喜ぶ）

この作品は「三言」中でもできのよいものであり、「我不淫人婦、人不淫我妻」（古1）という庶民のモラルが、裏返しではあるが貫徹され、陳商の立場は、『覺後禪』（『肉團團』）のテーマへとうけつがれている。——他人の妻を犯したために、自分の妻がその男に復讐される。それで恨みつこなしにバランスが保たれる。

古1は、二人の男を愛した王氏の悲劇であつたが、愛情をもたぬ男への結婚がもたらした悲劇が、「任孝子烈性爲神」（古38）である。

生藥屋の番頭任桂に嫁した傘屋の娘梁氏聖金は、以前から官吏の息子で女たらしの周得と關係があり、任桂が「向早出晚歸」であるのが氣に入らず、結婚後も周得を連れこむ。任桂の父親は盲目であつたが、それと察し「男子漢與婦人家在樓上一日、必有姦情之事」と息子に告げる。聖金の方は、周得の入智慧で任桂の父が自分にいどんだと申したて實家に歸る。しかし、任桂は不貞の現場に遭い、しかも妻の不貞が近所では周知と知つて、姦婦とその兩親、女中、姦夫の五人を殺し、自首して「凌遲處死」の判決をうけるが、「坐化」する。

この物語のテーマは、任桂の殺人者としての颯爽たる「好漢」ぶりと、「玉帝」がその「忠烈孝義」をめでて土地神に任じたというところにあるが、聖金の側から見れば、「周得與梁姐姐暗約偷期、街坊都里、那一個不曉得」というスキャンダルを糊塗しようとする兩親によつて、愛情をもたぬ男に押しつけられたという點からは、「從良」の型の6に當り、結婚後「偷漢」をすることでは2に屬する。ただし、この物語には、兩親の體面の犧牲になつたことに對する抵抗という側面はない。

姦婦姦夫の制裁というテーマで同じ型にはいるのが「蔣淑眞刎頸鴛鴦會」（通38）である。これを女の側から見れば、愛情を求めて男を遍歷する過程で、女の側からの離婚の不自由が原因となつて、「姦婦」の汚名をきるということである。

きりようよしの利口な娘が、兩親の賣り惜しみから蠹が立ち、兩親の留守に隣家の少年と通じる。ところが、兩親が急に歸宅したので、少年は驚いて逃げ歸り頓死する。兩親の方も娘の樣子に氣づき農民と結婚させる。夫婦仲

はよかつたが、過淫のため十數年で夫が死に、商人に再婚する。商人の旅行中に妻子ある男と私通するが、夫が氣づいて旅先から急に引返し、現場を押さえて二人を殺す。

このように淫奔として描かれる女――「婦人水性無常」――の典型は、柳宗元『河間傳』の河間の婦である。この系統に屬するものとしては「計押番金鰻產禍」（通20）がある。

宋の徽宗の時代に、計安という小役人に娘が生れ、彼女が十六歳になつた時、靖康の變に遭つて南下し、臨安で酒屋を開く。ところが、雇いいれた番頭の周得が娘を手なづけ、それが發覺すると事後承諾で入り婿となる。婿となつた周得は、仕事を怠けはじめるので追い出され、娘は戚青に嫁に出される。このあたりから娘に娼婦型の本能が目ざめ、「少女少郎、情色相當」であれば滿足できるが、戚青が年をとりすぎているのが不滿でけんかがたえず、とうとうつれもどされて下級武官の妾に賣られる。ここでも本妻との折合いが惡く、外に圍われたが、今度は武官の部下の張彬と密通し、その現場を武官の息子に見つけられると、その子をしめ殺して張彬と驅落ちする。旅先で張彬は病死し、そこで周得と出逢つて、よりをもどす。周得はもとの主家、計家の金を目あてに强盜を働き、計夫妻を殺す。連日計家に娘のことで因緣をつけに行つた戚青に疑いがかかり、處刑される。しかし、娘も武官の家の追手につかまり、役所での自供で周得もろとも處刑される。

この物語のテーマの一つは、一人の原因から多くの人間がまきぞえになつて死ぬということにあり、古26恒34とかさなる。もう一つは、轉々と男から男へ移るうちにすれつからしとなつて、世に容れられぬ人間に墮落していく樣を描くことにある。ただし、冒頭に計安が金明池の主（金鰻）を釣り、ふとした行き違いから、金鰻のたたりがあるぞという警告にも拘わらず助命しなかつた挿話をおき、娘の不倫の原因を、金鰻が復讐のため計安の娘に轉生したから

であると説明し、合理化をはかつているのは庶民感覺であろう。

ここには、河間の婦に女の「性」を見た柳宗元の冷靜な眼はなく、むしろ、池の主の轉生である娘と接近したため破滅をまねいた不幸な男女――武官の息子、計安夫妻、張彬、戚青、周得――六人の、死に到る經路に重點がある。ここからひき出される庶民の教訓は、「勸君莫害非常物、禍福冥中報不虛」、つまりさわらぬ神に崇りなしである。

また、娘が淫婦となつた原因を崇り――復讐に求める類話として「月明和尙度柳翠」（古29）がある。

柳府尹が着任して點呼の際、玉通禪師が來なかつたので、怒つて妓女を使い色戒を破らせる。玉通は柳府尹の謀略にのつたことをさとつて坐化し、柳府尹の家の娘に轉生する。

娘はやがて年頃になると、柳府尹は病死し、生活に困つて楊孔目の妾となるが、本妻の父の反對で「身價」の回收を訴えられ、「官賣」に付される。それから鄒主事の妾となるが、妾宅が色街にあつたので、門に立つてつぎつぎに男を連れこむ。そのため鄒主事から見離され、その後は「公然大做起來」というわけで、柳家の家名はすつかり汚される。

この物語のテーマは、「我身德行被儞虧、儞家門風還我壞」に示される因果應報であるが――等質の復讐に庶民の感覺を見ることができる――娘の行爲は「河間婦」型に屬する。この型の女を女性一般に廣げるのを阻止する諺として「偷鷄貓兒性不改、養漢婆娘死不休」（通38）があつて、民衆の良識を示している。〈1〉〈5〉を女性の例外としない配慮である。

通38・通20・古29は、いずれも女「性」を正面にすえての物語ではない。なぜなら、女の權利を認める思想はまだ存在せず、事實として存在する行爲を、因緣話か復讐談としてしか消化できず、女の人權の主張は、悲劇に終るしか

ない社會の閉塞狀況が續いていたからである。

從つて、通俗小說では、女の「性」のあわれさとして、くりかえし物語られ哀切の情緒を訴える作品は、場面を超現實世界に設定するものが多い。

「小夫人金錢贈年少」（通16）は、亡靈となつて慕う男につきまとい、「楊思溫燕山逢故人」（古24）では、それが執念となり、誓を破つて再婚した夫と、寡婦となつて女道士になつたが、還俗して後妻となつた女をとり殺す話に發展する。また「白娘子永鎭雷峯塔」（通28）は、白蛇が男をつけ廻す話であり、「鄭節使立功神臂弓」（恒31）では、一人の男をめぐつて爭う二人の美女（蜘蛛の化身）の鬪爭がテーマである。この恒31は人間的團圓――一妻一妾――などでは解決されない純粹さがあり、異類婚の遊仙譚となつている。

これらの物語は、男の側からの恐怖として語られている。鄭信という豪傑を例外として、凡夫にとつてはさわらぬ神に崇りなしの教訓性が强い。「太平之世、人鬼相分、今日之世（靖康の變の時期）、人鬼相雜」（古24）そして「時衰、鬼弄人」（通28）という時代に生れ合わせた男は、身の不運を嘆き「太平之犬」をうらやむほかないとして、恐怖と諦念が癒着している。

しかし、女の「性」の悲しさに着目すれば、現實世界に描くと「況太守斷死孩兒」（通35）の寡婦邵氏が、夫と死別し「哀痛之極、立志守寡」であつたにもかかわらず「見得貴（下男）赤身仰臥……邵氏有意、遂不叫秀姑（侍女）跟隨。自已持燈來照、逕到得貴床前、禁不住春心蕩漾、慾火如焚。分明惡草蒔蘿、也甚名花登架去」ということになり、自殺で結着ということになる。そこで、その哀切の情を純粹に發揮できる場として、超現實的世界が設定され、現實社會の束縛からのがれて自由な展開をはかる。民衆のうけとめかたを通28についてみれば、魯迅の「論雷峯塔

的倒掉」（『墳』）に白蛇を「怪」と認めず、法海和尚のおせっかい――おそらくは嫉妬とする解釋がある。

なお、これら「志怪」系の物語は、宋・元傳來の作品に多く、男を慕う愛情の簡截な表現（通16・通28・恒36）と、裏切られた時の直接的な嫉妬・復讐（古24・恒31）は素朴であるが、嫌味はない。

性の禁忌が最も嚴重で、禁欲を強いられる女は尼僧である。それだけに、いったん破戒したとなると壯烈である。「小尼姑是眞色鬼」――僧の場合は「和尚是色中餓鬼」（『西遊記』23回）といって、一對になっている――の本性を、「赫大卿遺恨鴛鴦絛」（恒15）は描いて見せる。

例によって「色」の分類から始める。

好色とは――一笑傾人城、再笑傾人國、豈不顧傾城與傾國、佳人難再得。

「石灰布袋、到處留跡」（俗語）は好淫である。

正色とは――張敞畫眉、相如病渴、雖爲儒者所譏、然夫婦之情、人倫之本。

傍色とは――嬌姿美婢、倚翠偎紅、金釵十二行、錦障五十里、櫻桃楊柳、歌舞擅場、碧月紫雲、風流姱豔。雖非一馬一鞍、畢竟有花有葉。

邪色とは――錦營獻笑、花陣圖歡、露水分司、身到偶然留影。風雲隨例、顏開那惜纏頭。旅館長途、堪消寂寞、花前月下、亦助襟懷。雖市門之遊、豪客不廢。然女閭之遺、正人恥言。

亂色とは――上蒸下報、同人道於獸禽。鑽穴踰牆、役心機於鬼蜮。偷暫時之歡樂、爲萬世之罪人、明有人誅、幽蒙鬼責[10]」

これを「入話」として本題に入る。

一人の好色風流男が、清明節に尼僧の菴を訪れて誘惑したところ、尼僧がのぼせてひきとめる。それを偶然察知した隣の尼僧も加わり、祕密のもれるのを恐れ、女童まで含めての亂淫生活をはじめる。また男を逃がさぬために頭を剃り、愛欲生活を續けるうちに男は精盡きて死ぬ。男の愛用していた鴛鴦繰が天井裏から發見され、また女同士のいさかいで、折檻された女童の口から祕密がばれるが、死體は坊主頭のため尼と誤認される。

危險を感じた尼僧らが、かくまつてもらうため逃げこんだ尼僧の菴には、出奔して圍われていた僧がおり、それぞれの男の家から出ていた捜索願いによつて一網打盡となり、殺人犯は斬罪、その他は罪に應じて處罰される。

先の分類によれば、「邪色」とは本來妓院での遊蕩であるが、この物語は、それに「好淫」を加えた「邪淫」ともよぶべき生態の展開である。二個所の僧院の尼僧の愛欲生活と、失踪した男を探索する探偵小說を組み合わせた作品であつて、ストーリーの構成は比較的よい方であるが、いやらしさを人間の本性として追求するのでもなく、また儒教の權威への挑戰、もしくは佛教を否定するという意志も見られず、話本の傳統にある穢褻[11]を繼承した作品というほかはない。――尼僧の實態を懲罰する意圖はあつたかもしれない。ただし尼僧の社會的地位を考えると、『金瓶梅詞話』のもつ意義を、これに認めるわけにはいかぬ。――亂淫の生活のはじまる場面は、後の『覺後禪』にうけつがれている。

恒15に至つて、男の女に對する不信の感情が明白に表明されたのであるが、それを一歩進めて輕蔑に終始するのが、莊周の超越的生き方をテーマにした「莊子休鼓盆成大道」(通2)である。

プロローグは、喪服をつけて墓をあおぐ婦人との出あいである。

塚中乃妾之拙夫、不幸身亡、埋骨於此。生時與妾相愛、死不能捨。遺言敎妾加要改適他人、直待葬事畢後、墳土

乾了、方纔可嫁。妾思新築之土、如何得就乾、因此擧扇搧之。

こう婦人の行爲を説明されて、莊周は疑問を抱く。

這婦人好性急、虧他還説生前相愛。若不相愛的、還要怎麼。

莊周の第一の妻は若くして病沒、第二の妻は過失があつて離緣。第三の妻田氏が、その疑問に對して「如此薄情之婦、世間少有」「我們婦道家一鞍一馬、到是站得脚頭定的」と貞女の心掛けを説き、莊周の節操のなさを責める。

本題にはいると、「莊周は分身隱形之法」を用いて死んだと見せかけ、若き楚國の王孫となつて田氏の意志をためしてみる。田氏は忽ち死んだばかりの夫を忘れ、王孫との再婚を夢みる。擧式の夜、王孫は卒倒し「生人腦髓」を熱酒で飲まねばなおらぬという。田氏は死後四十九日に滿たない腦髓ならば效能があると聞くと、莊周の棺を斧で裂き、手にいれようとする。とたんに莊周は生き返り、種明かしをしてみせる。

田氏が恥じて自殺すると、莊周はつぎの歌をうたう。

大塊無心兮　生我與伊　我非伊夫兮　伊非我妻
偶然邂逅兮　一室同居　大限既終兮　有合有離
人之無良兮　生死情移　眞情既見兮　不死何爲
伊生兮揀擇去取　伊死兮還返空虛
伊弔我兮　贈我以巨斧　我弔伊兮　慰伊以歌詞
斧聲起兮　我復活　歌聲發兮　伊可知
噫嘻　敲碎瓦盆不再鼓　伊是何人我是誰

これは脱俗の醍醐味を滿喫しようという欲求を、遠い過去の解脱の象徴的人物を借りてみたし、妻を徹底的に輕蔑し、女の本性を暴露して溜飲をさげるという物語で、レアリティに乏しいが、夫婦の關係を「偶然邂逅兮、一室同居」と割りきつてしまおうとする志向が注目される。通俗小說の作者たちが、良民の娘に目をむけて「婦人水性無常」をテーマにした、當然の歸結ともいえよう。

〈4〉 夫妻是一世之事

中國の小說には、家庭生活を描いた『紅樓夢』のような大作はあるが、家庭生活に批判の眼を注いだ作品はない。『浮生六記』を例外として、中國には「愛妻小說」とよべるものはない、と佐藤春夫氏はいう。(『からもの因緣』)

「愛妻小說」の生れない基礎に、女性に對する蔑視が底流となつていることは、〈3〉の最後にあげた通2が、それをテーマにしていることで證明されるが、通俗小說の世界でそれを示す諺は「夫妻不是今生定、五百年前結下因」(恒9)であつて、個人の力では變更不可能な何かによつて——そこに現實には親權が働く場合が多い——決定されているものを受けいれて、先祖の祭を絶やさぬことと、老後の生活を保證するものとしての子供を得る——「娶妻原爲生兒女」(恒27)——という實利的目的に限定して、結婚が考えられるためである。そこで、當然男子が妻に生れぬ場合、妾を容れることになる。たとえば「蔡瑞虹忍辱報仇」(恒36)では「有一秀士、姓朱名源、年紀四旬以外、尙無子嗣。娘子幾遍勸他取個偏房」とあつて、妻から妾をもつようにすすめる。「白玉孃忍苦成夫」(恒19)でも、やつと再會した時は、妻は「因自已年長、料難生育、廣置姬妾」ということになる。また友人も「尙無子嗣」ということを聞くと「原來老先生還無令郎。此亦不可少之事。須廣置姬妾、以圖生育便好」とすすめる。答える方も「多承指教。學生將來亦有此意」と、ふしぎとしない。つまり男女とも結婚の目的は共通であつて、當事者の愛は缺落している。

女の立場に特有の點は、結婚＝第二の「從」＝「有家」であつて、それに付隨する義務として、「從一而終」という倫理に奉仕する――逆にいえば、「七去」に反しないこととともに、これによつて「有家」が保證される――ことになる。

男の立場から見た夫婦の關係は、莊周ほど徹底的でないまでも、「夫妻本是同林鳥」に「大限來時各自飛」（古1）とか「巴到天明各自飛」（通2）の句が續く諺が示すように、しよせん夫婦は「偶然邂逅兮、一室同居」（通2）と割りきらざるをえないのである。

かくて本來夫婦となる際の願いは「人間夫婦願白首」（恒27）なのであるが、夫婦は「五百年夙世的寃家」（通13）であつて、あがいてみても仕方がなく、「夫妻百夜有何恩、見了新人忘舊人」（通2）も當然であり、それは「姻緣分定、自然千里相逢」（恒13）という運命に導かれていると考えるのである。從つてやもめ同士の結婚で「一個全不念前夫之恩愛、一個那曾題亡室之音容」も、去る者は日に疎しで、與えられた運命を甘受しようという論理に導かれる。そこで、たとえば、

惟願率土之民、夫婦和柔、琴瑟諧協、有過則改之、未崩則戒之、敦崇風教、未爲晚也。（通38）

という教訓が示す「夫婦和柔、琴瑟諧協」を地でいく恒9の陳多壽と朱多福の場合も、夫婦愛よりは「從一而終」の貫徹を「佳話」と見なす、士人の側からする民衆教化の意圖が露骨であつて、白々しさが目につくのであるが、この教訓を結語とする通38は、「河間婦」流の淫蕩婦人の生涯と末路を描いており、內容が裏切つていることから、民衆のうけいれるものでなかつたことがわかる。

夫婦愛を批評する二つの傾向が說話人の口から語られる。一つは儒家の敎えに反するものとしてである。〈3〉にひ

いた「雖爲儒者所譏、然夫婦之情、人倫之本」（恒15）であつて「正色」とされるべきもの、それを、より現實に卽していえば「夫婦之間、比爹娘更覺周備」（恒9）「只爲夫妻情愛重、致令父子語參差」（通12）ということになり、そこにも「孝」に優越せしめようとする口吻さえうかがわれる。だが「夫妻兩個、如魚似水、寸步不離」（古1）「如膠似漆」（通31）ということになると、愛情によるものか欲情の表現か疑わしくなる。一時期、おそらく嘉靖・萬曆の間に人情の自然を重視しようとする空氣があり、情欲を通じて表現されようとしたが、[12] 萠芽期に忽ち壓殺され、人間性解放の方向がねじまげられて「色情小說」へと傾斜したのであろう。

いま一つは、それに對する反擊であり、傳統的儒教倫理にそつたものである。

且如父子天性、兄弟手足、這一本連枝、割不斷的。儒・釋・道、三教雖殊、總抹不得孝弟二字。……近世人情惡薄、父子兄弟到也平常、兒孫雖是疼痛、總比不得夫婦之情。他溺的閨中之愛、聽的枕上之言。多少人被婦人迷惑、做出不孝不弟的事來。（通2）

「夫婦之情」が「孝弟」を凌駕する勢にあることを認めた上で、それを「近世人情惡薄」と判斷する。說話人の立場は、この兩極を往來しながら、「貴易交、富易妻、人情乎」（恒32）の「惡薄」を現實と見た上で、「貧賤之交不可忘、糟糠之妻不下堂」（古27）を適當とし、「富不易妻、仁也」（『唐語林』5卷）に歸着する。

そこで「不易妻」が一つのテーマとなる。（3）にあげた古1の場合も、「七去」に該當する妻は、商人の面子としても離緣せざるを得なかつたのであるが、未練があつたことは、說話人の「他夫婦原是十分恩愛的。因三巧兒做下不是、興哥不得已而休之」の說明をまつまでもなく明らかで、夫婦再會の情景に感激した吳傑に「爾兩人如此相戀、下官何忍拆開。幸然在此三年、不曾生育、卽刻領去完聚」といわしめた夫婦愛は、通俗小說的曲折をへた「不易妻」で

ある。

こうした、いったん他人の手に移った妻との再婚の物語の典型は、「范鰍兒双鏡重圓」（通12）の「入話」である。

靖康の亂でちりぢりになった二組の夫婦が、避難の途中でそれぞれ「一鰥一寡、亦是天緣」と夫婦になり、建康に流れついて居を構える。三年後に偶然逢ってそれぞれもとの夫婦にもどり、兩家は親類づきあいをする。

「進奴思想前夫恩義、暗暗偷泪、一夜不曾合眼」に舊夫を思う妻の情が現われており、この「交互姻緣」の物語が、女の立場を無視したものでなかったことがわかる。

古1に似た離緣、再婚の物語に「簡帖僧巧騙皇甫妻」（古35）がある。

左班殿直の皇甫松の妻に假想した破戒僧が、非番で夫が在宅しているのを見越して、思わせぶりな手紙と「落索環兒」と「金釵」を屆けさせ、當直中の妻の行動に疑を抱かせる。訴訟となるが、證據不十分で妻は放免される。離緣されて途方にくれ自殺をはかった時、――この女は歸るべき實家がなく「三不去」に該當する。[13]――救濟してくれた女があり、そのすすめで再婚する。一年後、夫と再會し、その時、後夫は破戒僧であり、妻に疑をもたせたペテン師であることが判明、破戒僧は處刑、妻は皇甫松の手にもどり團圓する。

古1は男にとって都合のよい話としての痛快さはあるが、「七去」を二度も使って、辻褄を合わせるなど、作爲が鼻について後味が惡い。それに反して通12の「入話」、古35は理くつぬきであるだけにさっぱりしている。この爽快さ明るさは、『白猿傳』に通じるものであり、古雅・稚拙の味わいがある。兩者が宋傳來の作品とされる所以であろう。

こうして並べてみると、「眞個天緣湊巧」（通12）に至る曲折に讀者の興味があったことがわかり、女の心情に共感

もなければ、同情も薄いといつてよい。「不易妻」は男の側からの一方的に撰擇できる行爲であつて、女性の人權という觀點はない。そこで夫婦は互いに「儞向東時我向西、各人有意自家知」（通14）と、人間は本來孤獨であるかの如き諺が生れる。しかし、「個」の自覺というよりは、むしろ男性のみに一方的に存在する權利に對する女性側の抵抗が生み出したものであつて、こういう狀況からは「愛妻小說が生れえなかつた」ばかりか、「戀愛小說」も榮える餘地がなかつたのは當然である。

〈5〉 有智（志）婦人、勝如男子

唐代の李娃、楊娼、あるいは狐に姿を借る任氏などの烈女が、近世社會で絕滅したわけではない。才女ぶりをたたえられる女、男まさりのモラルの高さ、內助の功、ひたむきな愛で話柄となる女性の物語も、數はすくないがある。

才女物語の典型は「蘇小妹三難新郎」（恒11）である。

「入話」に列擧されるのは、曹大家（班昭）、蔡琰、謝道韞（謝安の姪）、上官婕妤、李易安、朱淑眞であり、本文に登場するのは蘇軾の妹、蘇小妹である。相手役には秦觀が選ばれており、もちろん架空の才子佳人小說であるが、見せ場は婚禮の夜、小妹が秦觀に洞房入室試問三題を解かせることと、佛印禪師が東坡に「急流勇退」をすすめる二字一連の一三〇對の文字を、小妹が解讀して秦觀をためすこと。秦觀は解答を見てやつと解き、連環詩を送ると、東坡と小妹がそれに和したというところにある。

小妹の試問の第一は、絕句一首の出題の意を汲んで詩で答えること。詩人秦觀にとつてこれは容易である。

問　銅鐵投洪冶　螻蟻上粉牆　陰陽無二義　天地我中央

答　化工何意把春催　緣到名園花自開　道是東風原有主　人人不敢上花臺

はじめ王安石が息子の嫁に小妹を懇望するが、蘇洵は王安石を、他日事を起す奸臣と見ぬいて、娘の不器量を理由に謝絶する。そこで秦觀は道人に扮し、參詣した小妹を見染めたといういきさつがあるので、各句首におかれた文字を拾うと「化緣道人」になるという次第である。

第二問は、四句の詩中に陰された人物の名を推測すること。

問　强爺勝祖有施爲　鑿壁偷光夜讀書　縫線路中常憶母　老翁終日倚門閭

答　孫權　孔明　子思　太公望

第三問は、七字句の對句を作ること。

問　閉門推出窗前月

これには秦觀も思案にくれ、庭中の水甕にもたれている時、見かねた東坡が小石を投げこみ、そのヒントで答ができる。

答　投石冲開水底天

佛印禪師の詩は長いので省略し、贈答された連環詩をあげておこう。

[illegible]　（秦觀）

期歸阻久伊思　靜

これを小妹が解く。

靜思伊久阻歸期　久阻歸期憶別離　憶別離時間漏轉　時間漏轉靜思伊

これの返しとして

閨娘獨奪嫩王採
一津楊綠在人運　（蘇小妹）

女郎聞特已摹賞
歐　飛如馬去歸花　（蘇　軾）

の詩が秦觀に屆けられる。これらは「東坡問答錄」に見える詩であるが、まつたく知的遊戯の域を出ない愚作である。鄭・譚兩氏とも元・明の作とするが、あるいは明代の戯作者のさかしらと見るのが妥當ではないかと思われる。（口頭では文字の遊戯がわかりにくい）

こうした才女も「山川秀氣、偶然不鍾於男而鍾於女」であつて、作者によれば造化の誤りということになる。なぜならば「女子主一室之事」であるのが本來の姿であり、「主一室之事的、三綰梳頭、兩截穿衣、一日之計、止無過饔飧井臼、終身之計、止無過生男育女」であつて、男女の分業を守るべきだからである。

士人の「有智婦人」といえば、男をへこます才智ということになるが、庶民の「有智婦人」の型を「玉堂春落難逢夫」（通24）に見ることができる。これは、男に操を立てようとする妓女玉堂春と、別の旦那をもたせようとする鴇兒の虚々實々の駈引きに、庶民の智慧が發揮されるのである。

一年の流連ですつからかんになつた王三官を、鴇兒はまず玉堂春に嫌やがらせをして出させようとするが、承知しないので「倒房計」――口實を設けて揃つて外出し、途中で男をひき返させてまいてしまう（『李娃傳』ですでに使われている方法）――で男と縁を切らせる。

玉堂春は王三官の消息がわかると、鴇兒に王三官以外の男をもたないという願をほどきに城隍廟へ參詣するとい

つて連絡をとり、二百兩の金と策をさずけ、願をほどいて王三官と再びよりをもどさぬとの願をかけたという。策というのは王三官が親許に歸り再び來たというふれこみで、鴇兒を後悔させることである。王三官のふれこみで五萬兩入りの皮箱というのを見た鴇兒は、みごとにひつかかる。玉堂春は「金銀首飾器皿」をもたせて王三官を逃がし、怒つた鴇兒との爭いを街頭にもち出す。

鴇子　奴才、他到把我金銀首飾盡情拐去、倆還放刁。

玉姐　不要說嘴、噌往那裏去。那是我家。我同倆到刑部堂上講講、恁家裏是公侯宰相、朝郎駙馬、倆那裏的金銀器皿。萬物要平個理。一個行院人家、至輕至賤、那有甚麼大頭面、戴往那里去坐席。王尙書公子在我家、費了三萬銀子、誰不知道他去了就開手。倆昨日見他有了銀子、又去哄到家裏、圖謀了他行李。不知將他下落在何處。列位做個證見。……亡八淫婦、倆圖財殺人、還要說嘴。見今皮箱都打開在倆家裏、銀子都拿過了。那王三官不是倆謀殺了是那個。

鴇子　他那裏有甚麼銀子。都是磚頭瓦片哄人。

玉姐　倆親口說帶有五萬銀子、如何今日又說沒有。

このやりとりの結果、驅けつけた駐在らは「三官敗過三萬銀子是眞、謀命的事未必」と判斷する。玉堂春は氣のすむまで罵ることを認めさせて、洗いざらい惡態をついた後、身請け文書を鴇兒らに書かせ、見物人にも署名をさせる。

立文書本司樂戶蘇淮、同妻一秤金、向將錢八百文、討大同府人周彥亨女玉堂春在家、本望接客靠老、奈女不願爲娼。有南京公子王順卿、與女相愛、淮得過銀二萬兩——玉堂春は三萬兩といい張り、蘇淮らは一年間の費用を經費として主張し、群衆は二萬兩と判定する——憑衆議作贖身財禮。今後聽憑玉堂春嫁人、并與本戶無干。立此爲照。

正德　年　月　日　　立文書樂戸蘇淮同妻一秤金。

この勝負は玉堂春の勝利であつたが、〈2〉にあげたように、鴇兒は「從良」のことばでわなにかけ、山西の商人に賣りとばす。

商人に故郷へ連れていかれる道中の旅館では、騒ぎ立てて男を近寄らせない。山西に着いてからも、正妻の怒りを盾に男にいい寄る機會を與えず、〈2〉にひいた誓を守りぬく。

海千山千の鴇兒をペテンにかけるところは、「有智婦人」（古28・通25・通31）にふさわしく、また親のきめた緣談に從つて誓を破つた王三官に比べれば、「有志婦人　勝如男子」（通2・通31）――「智」と「志」は同音であつて、峻別されるわけではないが――と稱してよい、すぐれた人間像として玉堂春は通俗小說中に位置をしめる。

「有志婦人」は、モラルの高さ、內助の功、そしてひたむきな愛によつて既成の道德を越えようとするところに見られる。

第一の例として「李秀卿結黃貞女」（古28）を見よう。

旅商人を父にもつ娘が、男裝して手助けをし、父の死後、同鄕の商人と知りあつて義兄弟となつて商賣を續けたが、その間に女と悟られることがなかつた。二十歲になつて父親の柩をひいて故鄕に歸り、女にもどる。そこへ義弟に逢いに來て、女であつたことを知つた義兄が求婚するが、操の正しかつた證明のために承諾せず、それが評判になり、太監の仲介で結婚する。

男裝して男の仕事に從事する女性は、古くは木蘭があり、二拍17に武官の娘がある。しかし、それらは身體檢査の結果潔白が確認され、貞操がたたえられるという古28と異り、木蘭は「孝」が眼目であり、二拍17は武官の娘らしい

男まさりに重點がある。いずれもその珍しさが物語的要素の中心となつている。

同系の物語に「劉小官雌雄兄弟」（恒10）がある。

子供のない老夫婦が陰德を施すことを心掛けていたが、大雪の日に軍人とその息子を泊めたところ、寒氣にあたつて父親が死に、息子は「承繼」となる。その後、船が難破し救出された少年も義子となり、先の少年の義兄となる。やがて老夫婦も死に、二人も年頃になつたので義兄は嫁を迎えようとすすめるが、武官の子は承知しないので、燕にかこつけて意中をはかろうとする。

營巢燕、雙雙雄、朝暮啣泥辛苦同。若不尋雌繼穀卵、巢成畢竟巢還空。

すると義弟もそれに和す。

營巢燕　雙雙飛、天設雌雄事久期。雌兮得雄願已定、雄兮將雌胡不知。

この詩の贈答で義弟が女と悟るが結婚を明らさまに申し出ることをはばかり、もう一首所望する。

營巢燕、聲聲叶、莫使青年空歲月。可憐和氏璧無瑕、何事楚君終不納。

これによつて氣があることもわかり、「無媒私合、於禮有虧」というので媒人をたてて、正式に結婚する。

物語のテーマは「孝」――義弟は父と異鄕で死んだ母の遺體を運んで義父と並べて葬り、義兄も兩親の遺骨を運ぶ途中で遭難、義父と並べて兩親を葬つて、子供がないため「無祀之鬼」となるべき運命にあつた義父母の陰德に報いる――を主にし、因果應報をからませたものであるが、興味は「同榻數年、不露一毫稜角」の義弟（實は女）の「孝義貞烈」ぶりにある。

古28・恒10ともに「節孝兼全」という士人好みのモラルに、作者の狙いがある。

その一方を捨てて壯烈な生き方をした女の例が「蔡瑞虹忍辱報仇」（恒36）である。

赴任の途中、强盜に襲われて兩親と弟を殺された蔡瑞虹は、海賊の凌辱をうけるが、復仇を願つて生きながらえ、助けられた商人の妾となる。しかし、本妻の疾妬から遊里へ轉賣され、放蕩者が落籍して美人局をさせる。終始、復仇を願つて男に頼んでいた瑞虹は、美人局のカモに撰ばれた男を見込み、眞相をうちあけて放蕩者の手から逃れる。

最後の男が科擧に合格し、赴任の途中で偶然めぐりあつた海賊を捕え、また役人としての威力で殘黨も捕えて刑死させる。この男は子供にめぐまれなかつたが、側室の瑞虹に男兒が生れて嗣子を得る。（これは「從良」の4にあたる）瑞虹は、妊娠中に他家に嫁にやられた父の婢の子を立てて蔡家を繼がせることを夫に頼み、賊の刑死後、遺書を殘して自刄する。（「那時尋個自盡」の誓をする點は古4も同樣であるが、實行する點で瑞虹の「志」が賞贊される。）息子は生母の苦勞を上奏し、節孝坊を建てることが許される。瑞虹のこの生涯についての心境は、遺書中述べられている。

虹身出武家、心嫺閨訓。男德在義、女德在節、女而不節、與禽何異。……然而隱忍不死者、以爲一人之廉恥小、閤門之仇怨大。……妾之仇已雪、而志以遂矣。失節貪生、貽玷閥閱、妾且就死、以謝蔡氏之宗於地下。……

これによると「一人之廉恥小、閤門之仇怨大」が、彼女の生き方を支えた論理である。復仇を貞操の上位におく發想の來源をたどれば『謝小娥傳』（初拍19はそれを敷衍したものである）があり、この烈女ぶりは士人の好みであることがわかる。

「李玉英獄中訟寃」（恒27）は悲慘な烈女の物語である。

李氏の一男三女は、父の死後、遺産の相續權をめぐつて繼母によつていじめられ、一男は戰死した父の遺骨を引取るため蜀へ行かされ、途中で病氣になると繼母にいいふくめられた供におきざりにされる。親切な人の助けで、やつと遺骨を得て歸ると毒殺される。次女は富家の婢に賣られ、三女は乞食を命ぜられ、長女玉英は、嘉靖帝の妃の候補にも上つた器量よしなので（年齢が若いため失格）「玉英這個模樣兒、慢慢的覓個好主顧、怕道不是一大注銀子。如今急切裏尋人、能値得多少」という繼母の思惑で賤業はまぬかれるが、妹たちの扱いと繼母の子供との扱いの差を見かね、爭いがたえない。

ある日、繼母の留守中に書いた送春詩が繼母の目にとまり「奸淫忤逆」として訴えられ、「剮罪」に豫定される。玉英は獄中での屈辱にたえながら、あくまで寃罪を主張し、天子に上奏して認められ、再審をうけることに成功し、繼母の惡事を明らかにする。

この物語のテーマは繼子いじめであるが、「少不得嫁個丈夫、或者有個出頭日子」を唯一の頼りに生きぬいて、弟の怨みをはらし、血統を絶えさせられた復仇をした點で『烈女傳』中の女性としてふさわしく、蔡瑞虹と揆を一にする物語である。

内助の功は「趙春兒重旺曹家莊」（通31）が、それに當る。

妓女の趙春兒がなじみの客に落籍され、正妻の死によつて後妻となり、零落した夫のために「私房」を貢ぐが、夫は妻から必要なだけの金が手に入るので、破産前の坊ちやん氣分がぬけず、人にだまされては元手をする。春兒は連れて來た女中と紡績をして、勤勞の尊さを身を以て示すが、遂に女中まで夫に賣られてしまう。たまりかねて村童を集め、夫に寺小屋の先生をさせる。

十五年後のある日、かつて國子監の同窓であつた友人の姿を見て、夫は官につくことを夢想する。春兒も始めは相手にしないが、千金あれば官につくことができるとわかり、金策のための手土產を用意させ、國子監の在籍證明「文書」を縣にもらいに行かせる。次に一六七兩入りの罈を掘り起こさせ、町へ行つて銀貨と交換させてみると、少しもごまかさないので、やつと「私房」の全部を掘り出させて與える。（以上「有智婦人」ぶり）

それによつて夫は縣丞に、ついで二官を歷任して數千金の貯えができたので、辭職して父祖傳來の土地を買いもどし、衰微した曹家を再興する。

これは「破家只爲貌如花、又仗紅顏再起家」の句が示すように、破產したのも妓女のためであり、その妓女の內助で「再起家」するところに「有志婦人　勝如男子」たる所以があるとする。この物語は女に視點をおけば『李娃傳』の系譜に連るものであり、男に視點をおけば、必要なだけ金をもらう點で『杜子春傳』型といえよう。

最後に、因習に抵抗し、「兩心既堅、緣分自定」といつて、ひたむきな愛情で戀愛を成就した稀有の例である「宿香亭張浩遇鶯鶯」（通29）を見よう。

才子張浩は佳人を求めていたところ、見染めた女が隣家の李鶯鶯であつた。張浩は人を介して結婚を申し入れるが「女兒尙幼、未能幹家」と拒絕される。二人の戀情がつのり、遂に終生の契りを結ぶが、數日後鶯鶯は河朔へ赴任する父に伴なわれる。その間に張浩は叔父から强いられて婚約する。そこへ任滿ちた李家が歸り、鶯鶯は兩親にうちあける。

鶯　兒有過惡、玷辱家門、願先啓一言、然後請死。……妾自幼歲慕西隣張浩才名、曾以此身私許偕老。曾令乳母白父母欲與浩議姻、當日尊嚴不蒙允許。今聞浩與孫氏結婚、棄妾此身、將歸何地。然女行已失、不可復嫁他人、此

願若違、含笑自絶。

父母　我止有一女、所恨未能選擇佳壻。若早知、可以商議。今浩既已結婚、爲之奈何。

鶯　父母許以兒歸浩、則妾自能措置。

そこで訴狀で眞相を訴え、贈答した「香羅」と「花箋」を證據に張浩と孫氏の結婚に異議を申立てて容れられ「宜從先約、可斷後婚」の判決を得る。もともと張浩も鶯鶯を忘れかねていたので、團圓する。

これは文言體であり『綠窓新話』の「張浩私通李鶯鶯」とあまり隔てぬ時期の作品と思われる。『會眞記』の團圓型であるが、後來の通俗小說の「一妻一妾」型團圓でないところに、古雅の趣きがある。

この李鶯鶯は、「止有一女」という親の弱みを逆用して脅迫的にではあるが、眞實を明かし、許されなければ「請死」、許されれば「妾自能措置」と決然と實行に移す氣性の勝つた自主性のある女性である。訴狀の中にも卓文君・賈午の名を出しているが、古代的な純粹さに生きる女性として特筆してよいであろう。

これが失戀に終る例は多いが「王嬌鸞百年長恨」（通34）は、捨てられた女が、男の住む土地に送られる公文書中に、父の目を盜んで男の不實を示す證據を送り自殺する。男は罪を問われて刑死するのであるが、不貞の償いと復讐を死によつて貫徹する王嬌鸞は、李鶯鶯とは逆の方向に働く强い女性の型と見ることができる。「有志者、事竟成」（恒3）は一つの人生觀ではあるが、この女性の强さを根底で支えているのは、やはり「女子生而願爲之有家」の執念ではないであろうか。それを承認した上で、李鶯鶯・王嬌鸞に新しい女の先驅を見るのが妥當であろう。

しかし、こうした女性の出現が新しい時代の到來を告げるものであつたにせよ、必ずしも主流となる力があつたとはいえない。「崔待詔生死寃家」（通8）は娘から求婚し、火事のどさくさにまぎれに驅落ちして幸福になれるかに見

える。しかし結局發見されて殺害される運命をまぬかれない。「趙太祖千里送京娘」（通21）では娘の求婚が柳下惠を學ぶ「仁義」によつて拒絶され、自殺する。また見染めた男に生涯を託そうと、あえて私通にふみきる勇敢な娘も、「陸五漢硬留合色鞋」（恒16）では、にせものを闇の中で見わけられず不幸な結果に終り、「閒雲菴阮三償寃債」（古4）は相手の死によつて未婚のまま寡婦となる。「張舜美元宵得麗女」（古23）は男が科擧に合格したという他の要素によつて、驅落ちが兩親に許されるのである。

女からのひたむきな愛を表現した『離魂記』、男の變らぬ愛が成就した『無雙傳』など唐代で花開いた「傳奇」の世界は、明代ではその純粹さを稀有のものとし、陰濕なムード拔きでは構成されなくしてしまつた。それを敏感に見ぬいた說話人は、つぎのような女を用意することを忘れない。

「桂員外途窮懺悔」（通25）に登場する惡妻は、夫を破滅させるに至る。

蘇州の桂富五は商賣に失敗し、投身自殺をはかるが、施濟に救われる。施濟は義俠心のある男で「好施樂善」なので、しだいに家運が傾く。桂富五は施家の別宅を與えられ園藝に從事するが、施濟の父の埋藏金を發見し、妻のすすめによつて着服する。そして施濟の死を待つて會稽に移住し、發掘金を元手に大金持となる。

いつぽう零落した施還（施濟の子）は桂富五の羽ぶりを聞き、せめて父の貸した三百兩の返還を求めようとするが、富五の妻は夫に對して次のようにいい張る。

接人要一世、怪人只一次。攬了這野火上門、他喫了甜頭、只管思想、惜草留根、到是個月月紅了。就是他當初有些好處到我、他是一概行善、若干人沾了他的恩惠、不獨我們一家、千人喫藥、靠着一人還錢、我們當恁般晦氣。若是有天理時、似恁地做好人的千年發跡、萬年財主、不到這個地位了。如今的世界還是硬心腸的得便宜、貼人不富、

連自家都窮了。……如今這窮鬼來時不要招接他。等得興盡心灰、多少賫發些盤費着他同去。頭醋不酸、二醋不辣。沒什麽想頭、下次再不來纏了。

甘い顏を見せればつけ上るし、自分らだけが世話になつたわけではないのだから、わらじ錢を渡して追つぱらえというわけである。それが通用すると考える根據には「如今的世界還是硬心腸的得便宜」だという哲學があり、「接人要一世、怪人只一次」の智慧によるべきだというのである。

桂富五は「厚贈他母子同去」の氣でいたのだが、妻にいいくるめられ「賢妻說得是」と尻に敷かれてそのことばに從つたばかりに、說話人は彼らを不幸のどん底に落し、妻と息子を施家の犬に轉生させる。そして妻を責める富五に對し、妻はこういい返すのである。

男子不聽婦人言、我是婦人之見、誰教倆句句依我。

物語の後半は省略するが、要するにテーマは因果應報であつて、施濟の亡靈を出現させたり、犬への轉生を夢と現實を重ね合わせたり、手がこんでいるが、善人榮えて惡人亡ぶ式のたあいもないものである。ただ桂家の運命を、上昇から離散へ一轉させたのは妻の意見であり、「女賢うして牛賣り損う」が作品の眼目の一つである。しかも「男子不聽婦人言」と同じ口にいわせているところに、說話人の皮肉な視點がある。

通25は、心情の下劣な女によつて一家離散の運命に陷つた物語であるが、「喬彥傑一妾破家」（通33）は「立性貞潔、……無有半點狂心」の賢夫人のために一家離散した物語である。

商人の喬俊は、他人の妾を旅先で見染めて連れて歸る。妻の高氏はそれを見て、夫に二つの條件をつける。

一　倆今已娶來家、我說也自枉然了。只是要倆與他別住、不許放在家裏。

二　自從今日爲始、我再不與爾做一處。家中錢本什物、首飾衣服、我自與女兒兩個受用、不許爾來討。一應官司門戸等事、爾自敎賤婢支持、莫再來纏我。

一は妾との婚姻を承認する交換條件として、事實上の離婚――形式的には別居――を主張するものであり、二の身一つで出ていき租稅賦役はそちらで面倒を見よという條件は、慰籍料に當る。ところが、女から離婚ができないために、以下の悲劇が起る。

喬俊は間もなく、再び商用ででかける。妾宅へは里長から賦役の通知があり、代理の人間を紹介してもらつて雇うが、間もなく二人の間に關係が生じ人の口の端にも上るようになる。高氏は自分の目の届く所へおこうと考え、妾をひきとると、その男もついて來て、高氏の經營する酒屋で働き、高氏の娘にも手を出す。――民衆の智慧は、「一年長工、二年家公、三年太公」といつて警戒することを敎えているが、高氏は「自身正大」に自信をもちすぎ、不用意にも解雇しなかつた。

事情を知つて、高氏は中秋節に雇い人を謀殺し、死體を川に捨てさせる。死體が上つて、それをタネにゆすりに來た男を高氏はつつぱねる。――その時も說話人は「能殺的婦人、到底無志氣、胡亂與他些錢鈔、也不見得弄出事來」と批評する。――男は根にもつて訴え、高氏と娘、妾、手傳つた番頭も獄死し、家財は沒收される。

遊里で元手をすつて歸つて來た喬俊は悲觀して投身自殺し、妻をゆすつた男をとり殺す。

この悲劇の根本的原因は、夫の留守中は主婦の座を守らねばならず、離婚できない妻の社會的立場にある。しかし、說話人は、「立性貞潔」に對する自信過剩と、金を與えてゆすりの口を封ずる才覺の無さに非難の矢をむけ、そもそも事實上の離婚條件をのんだ喬俊が悪いと結論する。たしかに妻からの離婚ができないとすれば、――「陳御史巧勘

金釵鈿」（古2）に、夫の非行のまきぞえを避けるため、妻から「休書」を要求し、それが連坐をまぬかれさせる例がある。――現象的には説話人のいう通りであり、かくて次の教訓が得られる。

「婦人之語不宜聽、割戸分門壞五倫、勿信妻言行大道、世間男子幾多人」

通25は愚妻、通33は賢妻と、いずれも妻のことばに従つたため悲運に落ちた男の物語であり、これに類する話は、古2の、父親の手によつて婚約中の男と破談になりかけているのを悲しむ娘のために、男に支度金を與えようとして他人の手に渡り、娘を自殺に追いこんだ賢母、恒33の「入話」は、夫からの冗談の書簡に悪ふざけの返事を書き、それが人目にふれて噂が廣まり、榜眼及第で約束されていた夫の將來をふいにした才女夫人、など數が多い。

かくて「有智（志）婦人、勝如男子」の向うを張つて、説話人は「十個婦人、敵不得一個男子」（通22）の格言を用意しているのである。

三〈むすび〉

以上見て來たところによると、明代女性の運命は、「三從」の「從」をめぐつて展開し、「有家」を最大の目標とするものであつた。この保證を得るためには、「從一而終」でなければならず、そこから「節」と「烈」が要求される。「寧爲太平犬、莫作亂離人」が、すべての人の願いであつたとすれば、たとえ最低の條件であろうと生きたいという願がこめられているのであるが、女性に關しては、まつたく同じ形の「寧爲短命全貞鬼、不作偷生失義人」（通12）または「寧爲困苦全貞婦、不作貪淫下賤人」（古20）があつて、「節・烈」の關頭に立たされた場合は、苦しむか死なねばならぬことになつている。

魯迅は「舊日的常識」によつて、節烈を基準にして生きている女性を三分類する。

一　守節によつて表彰されるべき女性（烈は死ななければならぬので除外）

二　不節烈の女性

三　嫁入り前か、あるいは夫が生きており、暴行にもあわなかつたので、節烈かどうかわからぬ女性。

また「時下道德家」の定義する「節」とは、「夫が死んでも再婚しないし、私通をしない」。「烈」とは、1、「既婚者の場合も、婚約中の場合も、夫が死ねば殉死する」。2、「暴漢に襲われた場合、自殺するか抵抗して殺される」ものである。

そこで問題になるのは、分類三の女性――これが事實上、最多數をしめる――に對する男性の立場である。

魯迅は、「多妻主義」の男性が「女は男の所有物であるから、夫が死んでも再婚すべきではなく、生きていれば奪われるのを許さないのは當然」とし、戰亂にあつて一家離散の際に、「逆兵」（反亂軍）「天兵」（官軍）にあえば、妻妾に「烈女」になつてもらい、反亂の鎮定後に「節烈」を表彰する男。しかも、男の再婚は「天經地義」とされるので、別に娶れば、萬事完了とし、戰亂あるいは暴漢を非難することのない男のエゴイズムを、眞正面から攻撃する。（以上「我的節烈觀」）

一九一八年に鼓吹された「節烈の表彰」の回歸點を宋の「業儒」とし、清朝の儒者に至つて暴威をふるつたと魯迅は指摘するが、「三言」の描く世界は、まさしくその民衆版であり、私通・姦通は說話人の許容するところではなかつた。

民衆の思想は、その時代の支配者の思想であるという點からしても、また編者馮夢龍の序文の趣旨からしても、士

人の思想が民衆を支配している作品しか殘されないのは當然であるが、たびたびの禁書令をも考慮にいれた上で、そこに民衆のもつエネルギーの新しい萠芽を發見することができよう。

一つは「孝」から「貞」への重心の移動による親權の弱體化である。同次元の倫理の間隙をついて、意志の貫徹をはかる女性の登場である。これは「有家」の願いに反する結果となる場合が多かつたであろうが、「婦は服なり」と諦らめぬ女性像と見てよいであろう。范希周に固執する呂順哥に、その姿を見ることができたが、とくに李鶯鶯が、愛する男との結婚を承諾させるにいたる意志と才覺に新しい型の女性を見ることができる。(14)

「婦人水性無常」は、前記の男のエゴイズムの中にある、女からの離婚の不自由（通20に一例があるが、この場合も父親の手をへている）が最大の障害であり、女性の經濟的獨立が達成されるまで續く評價ということになる。女の「性」として痛罵されながらも、ぎりぎりの、女の自已主張が、大變ゆがめられた形で表現されているといえよう。復讐が「貞」を越えるとする蔡瑞虹の執念に、女性だけに閉鎖されないモラルが感ぜられる。結末の自殺、表彰は通俗小說の常套手法にとりこめられているが、泥まみれになつても最後の最後まで仇を追おうとする意志は、中國人の民族性の根底にある何物かを語るものと思われる。

以上、むすびは幾つかの感想にとどめておき、以下「士人と商人」「俠と僧」などの小說中のありかたとの關連で、再び考えてみたい。

注

1　定着の經緯については拙論「小說史における明時代――序論」『中國文學研究』第三號を參照されたい。

2　「三言」は傳來の話本の集大成、「二拍」を「自作總集」の開始とするのが通說であるが「老門生三世報恩」（通18）は馮夢

龍の擬作（畢魏「三報恩傳奇」の馮序によつて知られる）その他にも手を加えたと推定される作品があり、話本と擬話本の橋渡しの位置を占めるといえよう。

3 仁井田陞「支那身分法史」「中國の農村家族」「中國法制史研究」等。

4 作中人物の、階層による指向は注1の拙論を參照されたい。

5 離婚の不自由のための夫謀殺の典型例は「三現身包龍圖斷寃」（通13）である。占の結果、夫の死ぬ時間を豫め周知させておいて殺害し、その時間に身代りの男を投身自殺したと見せかけ、その後夫婦となる。

同様の例が「玉堂春落難逢夫」（通24）にあつて、「別有個心上之人……要圖改嫁」の場合は、夫を謀殺するということばが女の口から語られている。「莊子休鼓盆成大道」（通2）でも、再婚したさに、死んだばかりの夫の腦髄をとろうとする女が描かれている。また古くは、『搜神記』巻11の嚴遵の條に見える。

6 仁井田陞「金瓶梅と鍵」（『中國古典文學全集』月報第16號）同『中國の農村家族』第六章。

7 『明清小說研究論文集』中の「杜十娘」に關する劉葉秋・徐仲元論文。程弘「『警世通言』中的愛情故事」等。

8 石母田正『歷史と民族の發見』中の「商人の妻」參照。

9 不妊、姦淫、不孝、饒舌、盜竊、嫉妬、惡疾の七項を男の側からの離婚原因とする。（仁井田陞『中國の農村家族』第七章參照。）

10 こうして教えあげ、疊みかけていく語り口は、積み重ねていくリズムの快さにあつて、通俗小說の手法の重要な要素である。こうした效果をねらう手法は「酒・色・財・氣」の優劣論（通11）や、本文の春をひきだす枕とするため春の詩詞を並べあげること（通8）に見られるが、語り物の「入話」としては成功している。（桑原武夫『事實と創作』參照）

11 「話本」の起原が「俗講」に求められることが多い。俗講僧の文瀫に關する記事に次のものがある。

有文瀫僧者、公爲聚談說、假托經論、所言無非淫穢鄙褻之事。不逞之徒、轉向鼓扇扶樹、愚夫冶婦、樂聞其說、聽者塡咽寺

會、瞻拜崇奉、呼爲和尙。（趙璘『因話錄』卷4）

なお拙論「通俗文學」（『中國文化叢書』文學概論篇所收）を參照されたい。

12 『金瓶梅詞話』欣欣子序は次のようにいう。

譬如房中之事、人皆好之、人皆惡之。人非堯舜聖賢、鮮不爲所躭。富貴善良、是以搖動人心、蕩其素志。觀其高堂大厦雲窓霧閣、何深沈也。金屏綉褥、何美麗也。鬢雲斜亸、春酥滿胸、何嬋娟也。雄鳳雌凰迭舞、何慇懃也。錦衣玉食、何侈費也。佳人才子、嘲風咏月、何綢繆也。雞舌含香、唾圓流玉、何溢度也。一雙玉腕、綰復綰、兩隻金蓮、顚倒顚、何猛浪也。

13 「三不去」は糟糠の妻・舅姑に仕え、その三年の喪を終えた妻・離婚後行くべき實家のない妻。（仁井田陞『中國の農村家族』第七章）

14 『搜神記』卷15に、父權による改嫁に對し、死によって私約を果す二例が見られるが、非現實的要素を媒介としている。

〈附表1・撰述年代〉

古今小說

卷	題目	孫	鄭	譚	嚴	その他
1	蔣興哥重會珍珠衫	馮作？	明	明	明中葉以後	單行・今23
2	陳御史巧勘金釵鈿		明	明	明中葉以後	今24
3	新橋市韓五賣春情		宋	宋	？	單行
4	閒雲菴阮三償寃債	宋（長澤）	宋	宋	？	雨・單行
5	窮馬周遭際賣餑餑		元・明	元・明	南宋？	

6	葛令公生遣弄珠兒		元・明	元・明	?	
7	羊角哀捨命全交 一本作羊角哀一死戰荊軻	嘉靖以前	近代擬作	宋・元・明	明中葉以前	欲・寶・今12
8	吳保安棄家贖友		近代擬作	元・明	明中葉以前	今11
9	裴晉公義還原配	馮作？	近代擬作	元・明	明中葉以後	今4
10	滕大尹鬼斷家私	明	明	明	明中葉以後	今3奇3
11	趙伯昇茶肆遇仁宗	嘉靖以前	元・明	宋・元・明	?	寶
12	衆名姬春風吊柳七		明	明	舊本改編	清
13	張道陵七試趙昇		明	元・明	明・正德以後 萬曆以前	
14	陳希夷四辭朝命		明	明末	明中葉以前	
15	史弘肇龍虎君臣會	嘉靖以前	宋	宋	宋	寶
16	范巨卿鷄黍死生交	嘉靖以前	明	宋・明末	明中葉以前	欲・寶
17	單符郎全州佳偶	馮作？	元・明	元・明	萬曆頃	
18	楊八老越國奇逢		嘉靖以後	明	嘉靖以後	
19	楊謙之客舫遇俠僧		宋	宋	明中葉以後	
20	陳從善梅失嶺渾家	嘉靖以前	宋	宋	宋・宋(長澤)	清・寶
21	臨安里錢婆留發跡		元・明	元・明	?	

22	木綿菴鄭虎臣報寃	南宋(長澤)	明	明	元
23	張舜美元宵得麗女	嘉靖以前	元・明	(入)宋 元・明	明中葉以前
24	楊思溫燕山逢故人	嘉靖以前	南宋	南宋	南宋
25	晏平仲二桃殺三士	嘉靖以前	元・明	宋・元明	明中葉以前
26	沈小官一鳥害七命	嘉靖以前	宋	宋	明中葉以前
27	金玉奴棒打薄情郎	原型宋 馮作？	明	明	元
28	李秀卿義結黃貞女		元・明	元・明	明中葉以前
29	月明和尚度柳翠		元・明	宋・元明	明中葉以前
30	明悟禪師趕五戒	嘉靖以前	元・明	宋・元明	舊本改編
31	鬧陰司司馬貌斷獄		元以後	元・明	明中葉以後
32	遊酆都胡母廸吟詩		元末・明初	明	明中葉以後
33	張古老種瓜聚文女	宋・馮作？	宋	宋	宋
34	李公子救蛇獲稱心	嘉靖以前	元・明	宋・元明	明中葉以前
35	簡帖僧巧騙皇甫妻	宋	宋	宋	宋
36	宋四公大鬧禁魂張		宋	宋・元	元
37	梁武帝累修成佛		明	明	明中葉以前

22			
23	熊・寶・入(醉)		
24	寶		
25	寶		
26	寶	今32	
27			
28			
29	單行		
30	清・寶		
31			
32			
33	醉・也・寶		
34	欽・寶		
35	清・也・寶		
36	寶		
37			

警世通言

卷	題目	孫	鄭	譚	趙	
1	兪伯牙摔琴謝知音		明			今19
2	莊子休鼓盆成大道		明			今20
3	王安石三難蘇學士		明			粹1
4	拗相公飲恨半山堂	宋	宋	宋・元	南宋(長澤)	京14
5	呂大郎還金完骨肉	明	元	明		今31・粹3
6	兪仲擧題詩遇上皇		明	(入)宋		(入)清・寶
7	陳可常端陽仙化	宋	宋	宋・元		京11
8	崔待詔生死寃家 宋人小說題作碾玉觀音	宋	宋	宋・元		京10・寶
9	李謫仙醉草嚇蠻書	元以後	明			今6
10	錢舍人題詩燕子樓		宋・元	宋・元		醉
38	任孝子烈性爲神		宋	宋	元	寶
39	汪信之一死救全家		宋	宋	南宋末	單行
40	沈小霞相會出師表	馮作?	明	明	明中葉以後	今13

11	蘇知縣羅衫再合		明	明	明	
12	范鰍兒雙鏡重圓	宋	宋	宋・元	宋(長澤)	京16・也・寶
13	三現身包龍圖斷寃	元	宋	宋・元		醉
14	一窟鬼癩道人除怪 宋人小說舊名西山一窟鬼	宋	宋	宋・元	宋(長澤)	京12
15	金令史美婢酬秀童		明			
16	小夫人金錢贈年少 張主管志誠脫奇禍(三桂堂)	宋	宋	宋・元		京13・也・寶
17	鈍秀才一朝交泰	明	明	明		今22
18	老門生三世報恩	馮作	明	明	馮作	今21
19	崔衙內白鷂招妖 古本作定山三怪又云新羅白鶻	宋	宋	宋・元	宋(長澤)	京
20	計押番金鰻產禍 舊名金鰻記	舊本	宋	宋・元		寶
21	趙太祖千里送京娘		明	明	宋・元	
22	宋小官團圓破氈笠	明・馮作？	明	明		今14
23	樂小舍拚生覓偶 一名喜樂和順記		明			單行
24	玉堂春落難逢夫 與舊刻王公子奮志記不同	馮作？	明	明		
	卓文君具眼奔相如(三桂堂)*					

*兼善堂本卷6の入話

25	桂員外途窮懺悔	明	明		
26	唐解元一笑姻緣 唐解元出奇玩世(三桂堂)	馮作？	明	明	今33奇1
27	假神仙大鬧華光廟		元	元	
28	白娘子永鎮雷峯塔	舊本	明末	南宋	
29	宿香亭張浩遇鶯鶯	舊本	元以後	宋・元明	醉・寶
30	金明池吳清逢愛愛	馮作？	宋・元	宋・元	醉
31	趙春兒重旺曹家莊	馮作？	明	明	
32	杜十娘怒沈百寶箱	馮作？	明	明	今5繡
33	喬彥傑一妾破家		宋・元	宋・元	元明(長澤) 雨
34	王嬌鸞百年長恨	馮作？	明	明	今35繡
35	況太守斷死孩兒 況太守路斷死孩兒(三桂堂)		明	明	
36	皂角林大王假形 趙知縣火燒皂角林(三桂堂)		宋・元	宋	
37	萬秀娘仇報山亭兒	宋	宋	宋・元	醉・也・寶
38	蔣淑眞刎頸鴛鴦會	宋	宋	宋・元	清・寶
39	福祿壽三星度世		宋	宋	

40	旌陽宮鐵樹鎮妖	明	明			醉・鄧志謨「鐵樹記」
	葉法師符石鎮妖(三桂堂)					

*日本、舶載書目著錄四十卷本の全目によつて知られる。(孫)

醒世恒言

卷	題目	孫	鄭	譚	趙	その他
1	兩縣令競義婚孤女		明	明		今2
2	三孝廉讓產立高名		明	明		今1繡
3	賣油郎獨占花魁	宋傳來馮改作?	明・馮作?	明		(入)醉今7
4	灌園叟晚逢仙女		元・明	元・明		今8
5	大樹坡義虎送親 一名虎媒記又名虎報恩	馮作?	明	明	馮作?	
6	小水灣天狐詒書		宋・元			通醒1
7	錢秀才錯占鳳凰儔	明	明	明		今27奇4
8	喬太守亂點鴛鴦譜	明	元・明	元・明		今28精2
9	陳多壽生死夫妻	馮作?	明	明	馮作?	精4
10	劉小官雌雄兄弟	馮作?	明	明	馮作?	奇2

11	蘇小妹三難新郎		元・明	元・明	今17
12	佛印師四調琴娘		明	明	
13	勘皮靴單證二郎神		宋・元	宋	明初	醉・寶
14	鬧樊樓多情周勝仙	馮作？	宋		
15	赫大卿遺恨鴛鴦絛	馮作？	明	明	
16	陸五漢硬留合色鞋	馮作？	明	明	明初	寶
17	張孝基陳留認舅		宋・元		
18	施潤澤灘闕遇友		明	明		通醒4
19	白玉孃忍苦成夫	馮作？	明	明	
20	張廷秀逃生救父		明	明	
21	張淑兒巧智脫楊生		明	明		精3
22	呂洞賓飛劍斬黃龍		明	明	
23	金海陵縱欲亡身	馮作？	明・慶隆・萬曆			京21
24	隋煬帝逸遊召譴		宋・元	宋・元	
25	獨狐生歸途鬧夢		明	明	
26	薛錄事魚服證仙		宋・元			單行

27	李玉英獄中訟寃		明	明		
28	吳衙內鄰舟赴約		元・明			通醒2
29	盧太學詩酒傲公侯	馮作？	明	明		今15
30	李汧公窮邸遇俠客		明	明		今16 繡
31	鄭節使立功神臂弓		宋	宋	宋元・明初	醉・寶
32	黃秀才徼靈玉馬墜	馮作？	明	明		
33	十五貫戲言成巧禍 宋本作錯斬崔寧		宋	宋	宋（長澤）	京・也・寶 精1
34	一文錢小隙造奇寃		元・明		馮作・蘇州人作	通醒3
35	徐老僕義憤成家	明	明	明		今25
36	蔡瑞虹忍辱報仇	明	明	明		今26
37	杜子春三入長安		明	明		
38	李道人獨步雲門		元・明			
39	汪大尹火焚寶蓮寺	馮作？	明	明		
40	馬當神風送滕王閣		明	明		

注一　テキスト　古今小說　用明天許齊刊本景印　臺北世界書局本

警世通言　用明金陵兼善堂刊本景印　臺北世界書局本
　　明三桂堂刊本　36卷本
醒世恒言　用明葉敬池刊本景印　臺北世界書局本

二　撰述年代

孫・孫楷第「三言二拍源流考」「今古奇觀解題」（亞東圖書館本）
鄭・鄭振鐸「醒世恒言跋」（生活書店）「中國文學論集」
譚・譚正璧「中國小說發達史」「話本與古劇」
嚴・嚴敦易「古今小說四十篇的撰述時代」
趙・趙景深「小說戲曲新考」「彈詞考證」
長澤・長澤規矩也「書誌學論考」「京本通俗小說と清平山堂」
醉・「醉翁談錄」
寶・晁堮「寶文堂分類書目」
也・錢曾「也是園藏書目」
雨・雨窓集
欽・欽枕集
清・清平山堂話本
熊・熊龍峯刊四種小說
今・今古奇觀
京・京本通俗小說

精・小說精言
奇・小說奇言
粹・小說粹言
通醒・通俗醒世恆言
繡・勸懲繡像奇談　第一編

付　本稿執筆後、今西凱夫氏の「三言研究」（修士論文）を讀む機會を得た。その才氣には感服したが、論旨は贊成しかねる。本稿が、その批判となつていれば幸いである。